
ええじゃないかさん

とりえなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ええじやないかさん

【NZコード】

N1219F

【作者名】

とりえなし

【あらすじ】

「メディー中心、恋愛要素ありの田舎高校での物語。変人比率が若干多めになつてます。

第一話 朝

俺の人生でもトップスリーに入るであらう、激動の一日から一夜明け、俺は朝食をとりながら考え方をしていた。当然例の件についてである。

「……昨日のあれば夢だつたんぢやないか……？」

「おい直樹。朝食中に辛氣臭い顔すんな。飯が不味くなるだろうが」「う、まだ姉ちゃんは帰らないのか。俺だつて姉ちゃんと一緒には旨い飯も不味くなるつてもんだ。主に精神的圧迫感が原因で。

「ところで、あんた今日から弁当いらなんだつて？」

「……なんですと？」

そんなことを言つた覚えなんぞさうらないんだが。こちとら成長期の男子だ。いくら食つても食い足りない、ましてや購買のパンだけでは帰つてくることすら、儘ならなくなりかねん。

「は？ だつてあんた、杉田君が電話で母さんにそつ伝えてたぞ？」

「

「何！」

何考えてやがる、あのバカ！？

「とにかく、あんたの弁当ないから。それだけ伝えとく」

「ちょ……ええ！？」

母さんも俺に確認しろよ！ 息子よりその友人を信用するつてどういうことだ！？

「……義人め……あつたらとつちめてやる……」

朝から不快指数をここまで溜めてくれるとは、やつてくれる……

！ 台風一過だと思って洗濯をしたら、台風の目に入つただけで洗濯物が全滅した時の不快指数に匹敵するわ……！

「おい直樹、例のあの人だー。迎えに来てくれたぞー」

「……わかつた、待つてもらつてくれ

「くくく、飛んで火に入る夏の虫とはこのこと……。義人め
まれてきたことを後悔させてくれる……！準備、着替えも完了、あ
とは学校に行くだけ、時間も充分……。お仕置きの時間はたっぷり
あるな……。

「くおらあ貴様！よくもまあ、おめおめと俺の前に姿を現せたもの
だな！」

「……！？…………」「めんなさい、なおくん……」

「タツミ！？ どうしてお前がここにいる？」

「あー、直樹、いけないんだー」

「姉ちゃん、囮つたな！？」

「何のことやらさつぱり」

「とぼけるな！？ 義人の話題の後に 例のあの人 とか言つてお
いて悪意がなかつたといいきれるのか！？」

「狙つてやつたらどうだつてんだ？ ああ？」

「タチ悪つ！ 開き直りやがつた！

「あの……」「めんね？ 来ちゃつて……」

「別に来るのは構わんが……用件は？」

「一緒に登校したくつて……」

「……はい？」

「ダメ……かな？」

「ひゅーひゅーお二人さん、お熱いねえ

「黙れこの腐れ外道」

「外道らしくツーショットを撮つて近所に配り歩いてやうつか」

「……勘弁してください」

「駄目だ、姉者に敵つ氣がしない。てか勝率0%だ。

「学校一緒に通うくらいいいだろ、とつとと出でけ」

「姉ちゃんは早く下宿へ帰れ」

「九月後半までは残つて見物してやるから覚悟しとけ」

「そんな嫌な覚悟したくねえよ！」

「……それで、なおくん……いいかな……？」

「……義人を起こしに行くから、奴も一緒になるが……それでもいいなら許可する」

「うん！」

いつもして朝の登校メンバーにタシミが加わることになつたとさ。

「……若こいつていいねえ……」

「年増の姉ちやんは家でじい寝でもしどけ」

「……」

「……」めんなさい失言でした殺氣を放たないでください……」

第一話 遭遇

なんだなんだ！？
至近距離で叫ばれ

なんたなんた!? 至近距離で叫はれたもんたから
反射的に大
声で返しちまつたじやねえか!

るんですか！？」

「落ち着け保護者」

「一夢から醒りますにはやつぱり痛みですね、ほつぺたをつねつて……最近の夢は痛みを感じてしまつくらい高性能なんですね、これが現実の世界であるはずがないのに！」

「お、聞こえてるか？」

一先輩が石川先輩と一緒に夜にして大人の関係になつて出てきたなんて

「人聞きの悪い」と言つてんじゃねえ！ そんなことあるはずがな

かるうが！

「だから」これは現実だ!! だがお前の考えるがつた事実はなー!!

ありえない！

「……………ありえない……………」

タツミがやーんと落ち込んでしまつたようだが、それは置いてお

「う。今は保護者をこっちの世界に引き戻すことの方が重要だ。

「ならどうして先輩の家から石川先輩が出てくるんですか！」

「ただ一緒に学校に行こうって、タツミが押し掛けてきたというだけだ！ 断じて他意はない！」

「どうして先輩の家を知ってるんですか、石川先輩が！」

「……おくんの家とは家族ぐみの付き合いだからね……ただそれだけの話なんだよ」

お、タツミが影を落としながらも復活した。自己回復能力があると助かるな。説明の手間が省けるし。

「……じゃあ、先輩が石川先輩を家に連れ込んでやんこやんした、ってわけではないんですね？」

「いつの時代の表現だ？ にやんこやんて……まあ、お前の考えるようなことはなかつたと保障しよつ」

よつやく理解しよつたか。実際に時間がかかる。

「……そうですね」

「なにがだ？」

「先輩にそんな甲斐性あるわけありませんよね！ いやー、よくよく考えたら先輩に女性を押し倒すような度胸があつたらこんな事態にはなつてませんよね！ 先輩は国宝級のへたれだつて言つの！」

「

。 。 。

「先輩、疑つてすいませんでした、動搖してあり得ない仮定をしてしまいましたね……ってあれ？ 先輩？ もしかして怒つてます？

顔が怖いですよ？」

「おっこり」

俺は後輩にここまで侮られていたのか。なんてこつたい。

「で、なぜお前がここにいる?」「

まさか近所迷惑だけしに来ただけでもあるまい。

「先輩、一緒に学校行きましょう!」「

「断る」

「どうしてですか!? 石川先輩はよくて私は駄目なんて……それが先輩の答えなんですか! ト返答によつては先輩の体中の爪を剥いでムヒを塗り込み……」

「怖いから! 恐ろしいから! 精神的にも肉体的にも立ち直れないダメージを受けることになるから!」「では納得のいく」説明を!」

「お前の中学とうちの高校じゃ、場所が正反対だらうが!」

保護者の中学は俺の母校でもあるからして、場所は把握している。その位置はまさにうちを挟んで正反対にあるのである。

「……あー、そういうえば」

「理由は以上!」

「なら私が先輩を高校に送つてから、うちの中学に登校します!」「

「意味ねえ! そもそも時間が足りないし!」

「それは愛の力でカバーします! だからとつあえず一緒に登校です! 私の目の黒いうちは、石川先輩と一人つきりの登校なんて許しません!」

「こいつは言つても聞かないからな……」うなつてしまつたら、どうにかなだめすかして説得するしか……。

「……ここにいたんですか、探しましたよ

「んむ? 確か君は……」

「あはは……おはよう、岬」

「山本岬、と申します。以後お見知り置きを」

「これはどうも!」寧に、俺は三井直樹……そここの保護者のせんぱ

「想い人、ですね。存じてますよ」

「それで、どうして岬がここに？」

「学校行きますよ。連絡もなしに先に行くとは、どうこいつとかと思つてみれば」

「いやまだ先輩との話が……」

「行きますよ」

「もう少し……」

「いきますよ？」

「あ、なんか迫力が……。」

「もしかして岬、怒つてる？ やだなあ、ほんの些細な乙女心が生み出した產物といふか……」

「ルリの先輩さん、この子は借りていきますよ」

「先輩、ダメです！ こつ見えて岬は怒ると凄いんです！」

「どうぞ持つてつてください」

「先輩！？」

「それでは」

「あー、せーんーぱーいー！」

「ああ、古木さんが連れ去られていく……」

「これでよかつたんだ、これで……」

「そんな戦隊物のラストみたいなセリフで閉められても……」

「いい友達をもつたな、保護者……」

「それじゃなおくんが保護者みたいだよ……」

「それむ、タツミは偉いな。数少ない突っ込み役として、これからも

頑張つてもらわなくては。

「旦那、俺は思うわけだよ」

「何をだ。この裏切り者。貴様が原因で昼飯がなくなってしまったのをどうしてくれる」

朝っぱらから、よくわからん出来事が続いたが、一番の悲劇はこれで決定だ。その根本である義人は、今は俺の手によつて足が地から浮いている。ちょっとは苦しいはずなのにとり乱さない義人はさすがだ。常日頃、義人の姉さんからもつと酷い教育（という名の虐待）を受けてきただけのことはある。俺の渾身の脅しも、いつものと比べれば、子猫がじやれついてきた程度の認識にしかすぎないのだろう。どれだけ痛みに塗れた少年時代を過ごしてきたんだって言う話だが、実際問題やつには動搖の欠片もないのだから困る。

「なおくん、落ち着きなよ……」

「ひいつたことに慣れていないタシミは、おひおろするばかりで何もできないようだ。何かされても困るが。」

「冷凍食品に彩られた昼食をとるのは悲しいことだと思わないかね」

「んぬ？」

「冷凍食品には食品添加物が多く含まれている。その食品添加物は旦那の体に染み込んで、将来旦那の障害になるのはほぼ必定！」

そんなことを無駄に熱いテンションで述べられても困るんだが。

「確かにうちの母さんの作る弁当は冷凍食品が大半だが……それを理由に俺に購買のパン派になれと？ 購買のパンにだつて保存料くらいい使われてるだろ」

そもそもあの戦場で十分な量のパンが捕獲できるとは思えない。

今まで購買でパンを買うことなど、練習で死にかけた後、人がいなくなつてから買つくらいしかなかつたので、歴戦の勇者たちと違つて経験値が低い。その経験値の低い俺が昼のピーク時に購買に挑むなど、レベル10くらいで大魔王ゾーマとの決戦に臨むようなもの

だ。無謀すぎる。

「そこで提案するのが手作りの弁当だ！」

「朝から自分でそれを作れと？ 朝からそんなことしてる時間もないし、親に頼むのも気が引けるな」

「そこで紹介するのがこちら！」

「通販か」

「旦那を想つてくれている、心憎い後輩に作つてもうつ愛情たっぷりのお弁当だ！」

「はあ？」

「……いや、だからわ、今日保護者ちゃんと会わなかつたかね？」

「会つたな

「何か渡されなかつたかね？」

「渡されてないな

「……

「……

「ではまた来週

「までや

「までや

「ああ―――つ―――！」

「つるわこですよ、ルリ」

「愛妻弁当、先輩に渡すの忘れたあ！ そのためにわざわざ先輩の家に行つたのに！」

「それはご愁傷様です」

「うわーん、やけ食いしてやるー！」

「太りますよ

「……

「聞こえないふりしなくても……」

第四話 暑飯（後書き）

絵が……上手くなりたい。

第五話 オーディオ

「なおくんつていつも、どんな音楽聞いてるの？」

「なんだ藪から棒に」

「いや、なおくんつていつもイヤホンを耳につけてる印象があるからさ。移動中はともかく、それ以外の時にも」

確かに、田上の人と話すとき以外は、たいていつけてるかもしない。

「一万五千円もしたからな、このオーディオは。元は取ってくれないと困る。それに、だ」

「それに？」

「やかましい奴から話しかけられて、会話をしたくない時には、これを付けていることでスルーすることができる」

「やかましい奴？」

「旦那、どこのどいつだ？ 旦那に対してもやかましく何度も話しかけてくる奴というのは」

「自覚症状なしにその言葉を発しているなら、脳外科に急行することを勧める」

「まあ、俺なわけだが」

「わかつてゐるじゃねえか」

「当然。俺は旦那の好きな漫画から、もっとも恐れているものまで熟知しているからな」

なんて嫌な情報通だ。記憶操作して抹消したい。こう、頭を思いつきり殴つたら記憶飛ばないかな。斜め四十五度くらいから叩いたら、義人の脳みそも昔のテレビみたく調子が多少良くなるかもしない。

「でも旦那は律儀にも、俺のボケには毎回反応して突っ込みを入れてくれるではないか」

「ほつておいたらどこまでも増長するだらうが。貴様は」

「わかつてゐなあ、流石生れながらの突つ込みマシーン」「人を突つ込み以外に能のない機械扱いするなよ！」

「ぐだぐだと義人と話していると、タツミが思いついたように聞いてきた。

「じゃあ、杉田君はなおくんの趣味嗜好を知つてゐの？」

「おう、好きな漫画はラストイニング（野球漫画）。スピリッツに掲載）に学園革命伝ミツルギ（ギャグ漫画。絵が綺麗）。もつとも恐れているのは実の姉さん（理由は言わずもがな）だが、他に何か知りたいことはあるかね？」

「俺の個人情報駄々漏れ！？ プライバシーの侵害になるから黙りやがれ！ しかももつとも恐れているものはお前も一緒だろ？ が！」「いや、全世界の姉を持つ弟がそうだと思つた、うん」

「……そうなのか？」

「いやいや！ そんなことないからね！？ なおくん正氣に戻つて！？」

「……とまあ、旦那の恐れているものは実の姉さんなわけだ」

「ふむふむー、なるほどー」

「石井も急に出てきて、人の個人情報を収集してんじやねえよ！」

「人生何事も勉強だよー」

「その知識が将来役立つことなんてないからー」

「……脅迫材料ー？」

「さらつと恐ろしいことぬかしてんじやねえよー」

第六話 音楽

「それで、本題なんだけど」

「ん？ 本題？」

「だから……いつもどんな曲を聞いてるかつて話」

「ああ。 そういうえば、もともとそんな話から始まつたんだつたな。 義人とか石井が話に交じるとすぐに脱線するから困る。奴らは修正しようとしないから、そのまま話が続くし。」

「その質問には、旦那の親友にしてほとんどを知りつくすこの俺が 答えよつ」

「世間では人の弱点を周囲に言いふらす人間を親友といつのか。 初耳だ」

「石川さん、知りたいだろ？」「

「うわ、自分に都合の悪い話はスルーかよ。音楽聞いて、聞こえないふりをする俺とどつちが悪質なんだか。」「

「……教えてくれる？」「

「本人がいるところで他の人に聞くか」「まずは……もう恋なんてしない」「

「古っ！」「

「君がいるだけで」「

「古っ！」「

「神田川」

「時代がさらにさかのぼつた！？」「

「関白宣言」

「ねえ！？ ほんとに！？ 杉田君、からかつてるんじゃ！？」「

「旦那、本人から返答を」「

「……好きで悪いか」「

「本当だつたんだ！ 事実なんだ！」「

「なんかその言い方には棘があるな。昔のものはいいものが多く

いの」。

「最近の邦楽は大したのがないな。昔はよかつた……」

「何その老人が昔を懐古するみたいな感じ！？ いつたい、なおくんは何歳！？ 高校生の感覚じゃないよ！ もつと青年らしくしようと！」

「ああ、でも洋楽も聴くな」

「どんな？」

「カーペンターズとか」

「だから古いよ！」

「ビートルズとか」

「ねえ、何なのそれ！？ 狹つてるのー？」

「だつてよう…… 最近のバンドとかつむやこまつり似たり寄つたりにしか聞こえんし……」

「若者の発想じゃないよそれ！」

「俺には旦那の気持ちがわかるな」

「そうなのー？」

「90年代のアーティストは神がかつてたからな」

「それはなんか違うと思う！ よく知らないけど！」

「そうだよねー。セイバーマリオネットとか、いい曲が多かつたよねー」

「だがタツミ、温故知新といつもあることだ。古いものの価値を知ることは有益だぞ？」

「それなら最近の曲の良さも知りたいよー。」

「言つてること矛盾してるとよー。」

「あ、でも結構最近の曲も知ってるぞ？」

「……なんて曲？」

「……お尻りかじりむし、とか？」

「微妙に古いじジャンルがなんか違うー。高校生らしくないー。」

「崖の上のポニョ、とか？」

「だからどうして偏ってるかなあ！？」

「タイトル知つてて、店とかでかかつてる曲つてこれくらいだし」

「だから守備範囲が狭いよ！」

「それは違うぞ、タツミ。俺は九十年代の名曲やフォークソングに
関してはたいていの人よか知識があると自負してる」

「守備範囲が広いんだか狭いんだかわからないよ！」

第六話 音楽（後書き）

読者さんの中に自作の四コマ（絵とか構図は下手くそ）見たい人が
ます、いるならクシイにでも載せますが。

第七話 五七五

「残暑が厳しいですねえ」

確かに、九月も後半なのに三十度近く気温があるのはきついですね、健三さん。

「こんなことでは授業に身が入らなくなるのも必然と言えるでしょう」

それでも授業を受けるのが高校生の宿命なんですよ。

「主に私が」

健三さんがかよ！

「……クーラー効いた部屋で酒でも飲みたいですねえ、今給料もらつてんだから、税金分くらいしっかり働いてください！」

「誰か！ 私に酒を持つてくる勇氏はいませんか！」

未成年！ 僕たち見成年！ しかも授業中に堂々とサボるうどしないでください！

「やる気がなくなつたので、授業以外のことをやります。いつも通りあなた方は私を楽しませることに心血を注いでください」

「一期になつてもやりたい放題だなこの人は！ テスト範囲を順調すぎるペースで終えてるからといって、これでいいのか…？」

「今の気持ちを五七五で表してください。ではまず清水」突つ込み入れる暇もねえ！

「人間はどうしてお腹がへるのかな」

腹減つてるとか清水！？ さつき購買のパン何個か食つてたどろうが！ 昼前なのに！

「次、深谷」

「おかしくね 十一連勝 ありえんて」

授業中に巨人の連勝について考察！？ 今まで授業何受けてたんだよ！？

「杉田」

「おかしくない 他の球団 弱いだけ」

なんか会話始めたこの二人！ 巨人ファンと中日ファンの争いが始まつたのか！？

「次石井」

「ぼーによぼーによポニヨ 魚の子ー」

空氣読んでねえー！ しかも何これ！？ 五七五ですらないよ！

今の気持ちもわからないよ！ 何がしたいんだお前は！？

「なるほど……中国古典文学には名作が多いので、日本人ももつと積極的に読むべきだと思うのですか」

ポニヨの歌にそんな意味が込められていたのか！？ 暗号！？

誰かつっこめよ！

「いえー、トイレに行きたいのでー、許可を求めたのですがー」

「そうですか。どうぞいつてらっしゃい」

しかも意味違つた！ なのに健三さんピクリとも表情を変えてないよ！ なんだこの異空間！？ 飛び出してえ！

「次は玉野、どうぞ」

「パルプンテ いいから起きろ パルプンテ」

何があつたんだ玉野！？ 打開したいのか！？ どうにもならない事態にあつて、その事態を開拓したいのか！？

「もう少し詳しく、もう一度玉野」

「数学の 今日の宿題 まだ未完」

ただ提出できないのをどうにかしたかつただけかよ！ あれか！？ サッティーが宿題出していたことを忘れるとか、そういう奇跡を起こしたかつたのか！？

「ダメな生徒ですねえ」

あなたが言うな！ 教師として駄目だからな健三さんもー！

第八話 五七五 続き

「第八話 ネタは続けて 五七五」

「なんか事情説明から始まっちゃった！」

「最近の 趣味はひたすら 眠ること」

寂しいなその趣味！ いや別にいいんだけど！

「いい天気 担任教師は 能天氣」

「上手いこと言わなくていいから！ それともこれは皮肉か！？」

「兄弟は いいから俺に 姉妹くれ」

授業中に何考えてんだこいつは！？

「どう見ても 三井君受け ありがと！」

何をどう見ればそういう結論に！？ 僕はノーマルだからな！？
変な妄想のおかずしないでくれよ！ ……え！？ もう手遅れ

！？

「タツカラプト ポッポルンガ プピリットパロ」

ポルンガ（ドラゴンボールに出てくる神龍の凄い奴）を呼び出す

呪文だと！？ そうまでして何をかなえたいんだ！？

「サッティーよ 宿題のこと 忘れろよ」

また玉野かよ！ しつこじよ！ そこまで嫌なら初めから宿題や

つてこいよ！ 玉野が宿題忘れるのなんていつものことじゃねえか！

「健三さん 今戻りました トイレから」

石井、戻ってきた報告までやる必要ないだろ！

「そうですか 自分の席に 戻りましょ！」

「健三さんも返した！？」

「ああもうす ぐ授業おわる な次はひ

ただ思つてることを無理に五七五に呑みこむとしなくていいか

らー。

「……ふう、それでは今日の授業をこれで終わります。お疲れ様でした」

最後まで グダグダだったな この授業 (三井心の一句)

「授業も終わったことだし、反省会と行こうか

「ああ、巨人の連勝はどう考えてもおかしい。何かやつてるのは明白」

白

「ふん、これだから捏造好きな中日ファンは……」

「同一リーグの下位チームからエース、四番、守護神を引っこ抜いてまで勝とうとする金慢チームは言つことが違うな」

……あつちは野球で盛り上がってるな。セリーグファンつて仲悪い印象があるけどどうなんだろう。

「わかつてないな！ あの強気さが受けに回るところが萌えるんじゃない！」

「でも、どっちに回ってもオッケーだとは思わない！？」

「いや、このクラスには受けが圧倒的に不足しているからして……」

……なんだろう、あつちの話題を理解してしまったら、人として終わりな気がする。

「まったくー、おかしな人たちだよねー」

「お前が言うな石井」

ボニョの歌とトイレとどう関連があるんだ。五七五でもないし。

「……放尿ー？」

下品なオチを付けるんじゃない！

第九話 暴走

昼休み。本来なら弁当を食つたか、宿題をやるか、図書室で読書でもしているのだが、今日は少しばかりいつもと事情が違つ。

「…………ひもじい…………」

「旦那、そう落ち込むなよ」

「黙れこの厄病神が。誰が原因でこの悲しい事件（俺の昼食抜き事件）が発生したと思つてやがる。反省してお前の昼飯をよこせ」

「断る」

「少しくらい分けてくれたつていいじゃないかよつー。」

「だつてもう早弁したし」

「いつの間に！？」

「じゃあパンを奢れ。お前にはそれくらいの義務がある」

「財布忘れた」

「お前つてやつは！」

「そういう旦那は？ 購買でパン買つてくれればいいじゃん」

「…………できるならそうしどる。今日は朝からいたたしてたせいで俺も財布を忘れたんだよ」

「ぐへ、そういう日に限つて。タシミが朝から押し掛けてくるなんてイベントをえなければ、ここまでひどいことにはならなかつたものを……。

「…………アイム、ハングリー」

「言葉にしたら少しほは空腹が紛れたか？」

「まぎれるわけなかうつが！」

「ああ、怒鳴るとますます空腹が……。

「ねえねえ辰美ー」

「…………」

「最近私太っちゃつてしまー」

「…………」

「ダイエツトしようつこも、味覚の秋だしー、ビリコムツカと思つて

れー」

「…………」

「…………三井君つてセレモニ顔いいし、告つねやおつかなー」「…………」

「いや、いやにー?」

「動搖しそう。…………つて安心しなタツミ、冗談だから、がくがく搖すると会話が成り立たなくなるでしょーが!」

「冗談? 本当に[冗談?]」

「私はあんたと張り合おうとか思つてないから。趣味じゃないし

「…………よかつた……」

「心底ほつとしたみたいね…………まあいいや。で? そんなに気に入るなら、タツミの田那に弁当でも分けてあげたり?」

「だだだ田那! ?」

「動搖しそうだつて。杉田君だつて三井君をそつ呼んでるでしょーが。過剰反応しそうだぞ? 何かあつたか?」

「…………」

「いや、黙られると何かあつただらうと邪推したくなるんだが」「それに食べさせてあげるなんて早すぎるよー」

「そこまでも言つてないから」

「…………でも…………それくらいなら…………」

「そんなことクラスのど真ん中でやられたら、普通逃げ出したくなると思つナビ」

「少しくらい、大胆になつてもいいよね…………?」

「…………青春だなあ…………。若々しいわ」

「…………あの、ちょっと…………なおぐんのとこ行つてきていい?」

「はいはい、いついらつしゃー」

「…………」

「……あの様子だと……告白したんだろうなあ……」

「ねえねえ、何かあつたの？」

「タツミが告白したっぽい」

「ついに！？」

「本当！？」

「面白そう、だし観察ね！」

「「「当然」」」

第十話 気持ち

「……体力が……残り少ない……」

「旦那のHPが赤く点滅しているわけだな」

「HP言つな。しかし、もう動くのも億劫だ……」

無駄な動きは死につながりかねん。できるだけ派手な行動は避けるように……。

「そういうえば今日の部活は陸トレだよな。筋トレをどれだけやられることやら」

「……これ以上気が滅入るようなことを言わんでくれ……いかん、マジでそんなことやつたら力尽きるわ……。

「なおくん、……ちょっとといいかな？」

「タツミ？ 用件なら手短に頼む」

今日の体力は、できる限り使用を制限したい。

「私のお弁当、少し分けてあげようかなって」

「あなたが神か！」

「いやいや、そんな大げさなものじゃないよー」

そんなことはない。今の俺にとつては、タツミの姿が神々しく見える……つー

「私が」ときにできることが「まし」といひ、何なつとお申し付けください、美しいお姫様

「うわー……旦那がプライドとかその他もろもろを投げ捨ててる……」

黙れ、災厄の元凶が。プライドでは腹は膨れないのだよ。

「ええ！？ お姫様！？ そんな、私……なおくんに……」

「旦那、石川さん真に受けてるわ。昼休み終わる前に飯食えよ？」

「……そうだな。馬鹿なこと言つてないで、このおじぎりもうつてもいいのか？」

飯食う時間なくなるし。

「はつー? ビツヤビツヤー!」

タツミがトコシアから戻ってきたよつだし、小さめのおにぎりを

口に含むと

「むぐうー?」

「……どつかな? お弁当は毎朝私が作つてゐるんだけど……」

「……」

「結構自信作なんだけど……どつかな?」

「……一言いいか?」

「なに?」

一呼吸おいて、感想を述べた。

「味が濃ゆい! こんなに食つてたら生活習慣病になるやー?」

そう。タツミのおにぎりは、これでもかといつぱり塩が入つて
いたのである。

「味が濃い方がおいしさと思つんだけど……」

「そんなレベルじゃない! これはあれか! ? 高カロリーで血圧
を上げよつとでもしてゐのか! ?」

「朝は低血圧だけど、そんなことしないよ!」

「なら改善しどけ! 数年後泣き見ることになるか! ?」

「……じゃあ、このお弁当はいらぬよね……」

「いや、

文句ははづが、それでも今の俺にはカロリーが必要だ。
「」の弁当はありがたく分けでもらひ。……その礼に大抵のこと

聞いてやるつ

「え……」

「確かに味はあれだが、それでもタツミが俺にくれたといつその優
しさは十分に受取つたからな」

「旦那、くつせー」

「やかましいわHENNAが

「HENNA! ?」

第十話 気持ち（後書き）

あー、笑う犬おもしろかった。また復活しないかな、内Pとか上々とか笑う犬とか。

第十一話 危険

「旦那旦那、そういうえば昨日こんなものを見つけたんだが」「そう言って義人は、バッグから何か小さいものを取り出した。「なんだそれは……？」

少しばかり警戒しながら、義人の手の中にあるものを覗き込んだ。かつて何度か馬鹿馬鹿しいトラップを仕掛けられ、見事はめられた苦い経験があるため、慎重な対応である。

「そんなに警戒心をあらわにしなくてもー」

「お前らには煮え湯を数え切れんほど飲まされてるからな。これでも足りないくらいだ」

「ちょっと待つてよー、杉田はともかくー、僕まで一緒にされるのは心外だなー」

「いやいや、俺が混ざつてる方がおかしいだろ」「何言ってやがるんだこいつらは。」

「俺から見れば一人とも同類だ。昔から義人にやられているのは確かだが、石井と会つてから悪化したのもまた事実だからな」「ひどいなー」

「ああ、まつたく

「今までの行動を思い返してからその言葉を吐くんだな……。で? 義人は何を発見したんだって?」

「話がそれかけたので、軌道修正。」

「そうそう、こいつを見てくれ。どう思つ?..」

「……デジモンか? また懐かしいものを……」

「ブツブー、外れ」

「じゃあなんだよ?」

「ヨーカイザーだ」

「懐かしいなあ、おい!..」

ヨーカイザー。デジモンペンギュラムとポケモンを合体

させたような、万歩計の形をしたゲームである。時代が時代なので、知りたい人はヤフーでもグーグルでも調べてくれ。記憶から抹消されかけていたものを、よくもまあ見つけ出してきたものだ。

「今は東海地方を旅してる」

「しかも今になつてまた始めたのか！？」

「ヨーカイ、ゲットだぜ！」

「確かにそんなゲームだけど、そのフレーズはやばいって…」

「バトルの前には振りますモンモン」

「それゲームが違うから！ そつちは『デジモンだから…』」

「まあ、デジモンもたまごっちの一番煎じも同然だし」

「いろんなどこから苦情が来るようなこと言つんじやない！」

「世界は模倣の上によつて成り立つているのだよ」

「それはある意味正しいが、ここで使うのは間違つてる…」

「アイデア？ パクられたのに気がつかない方が悪いんだよ

「模倣大国、中国が貴様は！」

「……旦那、色々とまざい気がしてきた」

「今さら…？ 僕はさつきから冷や冷やもんだよ…」

「中国人はクレヨン shinちゃんは中国で作られたものだと思つてる

とか、言わないようにしておこうな」

「……堂々と口に出してるじゃねえか…」

第十一話 発見

「……それでは、今日の部活はここまでだ。お疲れ」「終わったあああ

何が悲しくて、大会が終わって自由なはずのこの時期に長距離走筋トレ地獄を味わされなければならんのだろうか……。シーズンオフですよ？ 水泳部ですよ？ バカ広いこの学校の周囲（一周二キロ超）を走らんといかん理由などあるだろ？ か？ 否、ない！

「これから部活の度にこんなことをせられてたら体が持たん！」「おお、そこまで言つからには小倉さんに直談判してくれるのだな

「……人生、諦めが肝心だと思つんだ」「弱つ！」

だつて、あんな筋肉ダルマに直談判したところでメニューが変わることは思えんし。夏は実際変わらなかつたし。頭の中身まで筋トレで筋肉に変えたに違いない、あの先生は。

「まあまあ、せっかく部活も終わつたことだし、帰つて体を休めようではないか」

「そうだー、この前ー、面白いものを見つけたんだー」「何を？」「

「知りたいー？」

「その言い方をされたらな。気にならないって言つたら嘘になる」「

「じゃあー、教えてあげよ！」「

「イッキー、それはどこにあるんだ？」

「帰り道の途中だよー」

ふむ。おもしろい店でもできたのか？ うまいラーメン屋とか。
「食べ物関係か？」

「おおー、三井さえてるねー。その通りだよー」

予想通りだつたのか。これじゃあ、実際に見てもあまり驚けないかもしけれないと。

「まあー、一緒にそこに行つてみよー」

「着いたよー」

「はあ?」

連れられて来てみたはいいけど、特に新しい店舗は見当たらない。 しいて言えば、昔からある焼き肉の店（某飲食人気店紹介番組にも取り上げられたことあり）くらい、だろう。

「おいおい、新しい店なんてないじゃないか」

「んー? 僕新しい店を見つけたなんて言つてないよー?」

「飲食関係つて言つてただろ?」

「うんー。だからあそこー」

そう言つて、石井が指し示したのは……

「自販機? これのどこがおもしろいんだ?」

「しつかり見てよー」

しつかり……?

「……つておい! なんだこの自販機!-?」

「ねー、面白いでしょー?」

「この田舎都市にじうしておでん缶の自販機が!-?」

「どこの企業が設置したんだしょー?」

「購入者層がわかんねえよ!」

ちなみにレパートリーは豊富で、おでん缶のみならずパスタ、ラーメン缶も入つていて。値段は三百円、四百円である。

「……誰が買うかわかんねえよ……」

「僕は全種類買つたけどねー」

「……ちなみに味は?」

「そこそこだつたなー」

「そつか……つて義人!-?」

「なんだよ田那」

「いくつ買つつもりだ！？」「

「たくさん」

「お前アホだろ！？」

購入者層はこういう変人なんだらうな……と実感してしまった。

ある休日の午後、俺と義人はかつて毎日のように通つた塾の前に来ていた。

「ここに来るのも久しぶりだな……」

「神田先生は元気かね？」

北高に合格するため、義人たちと共に精進してきた塾。その風貌は以前と変わらない様子だった。

「しかし中身も一緒にとは限らん」

「実際に見て確かめるのが吉だな」

義人の言う通りだ。勝手知つたる嘗ての学び舎。ずかずかと遠慮なく入つていった。随分と騒がしいので、授業はまだ始まってないらしい。

「あれ……三井先輩に杉田先輩！？」

「俺たちの名を知つてているとは……何奴！？」

「義人、そんなノリ必要ないから。……えーっと、お前は……、そうだ！ 井上だな！」

「……今、名前忘れてませんでしたか？」

「宗平、仕方ない。旦那は役に立たない知識は覚えていない主義だから

「フォローになつてませんつて！ 結構ひどい」と言つてますからね！？」

「まあまあ、俺に免じて許してやつてくれ」
「三井先輩も同罪です！ いやむしろ先輩の方が元凶で、重いくらいですよ！」

まったく、無礼な後輩だ。中学の水泳部時代に、もっと躊躇つておぐべきだつたか。

「また何か失礼なこと考えてません！？」
鋭いな。

「ところで、俺たちがここに来たのは用事があるからなんだが……」「先生呼んできますか？」

「いや、別にいい。こっちから先生のところへ行くから。密として呼ばれたわけでもなんでもないからな」

「神田先生は職員室か？」

「たぶん……今の時間なら。ただ、他の生徒が質問とかに行っているかもしれんですよ？」

「そうだとしたら待つさ」「……用事があるんでしょ？」「…

「用事は金井先生とは関係ない、別件だ。ただ挨拶だけはしつゝと思つてな」

「お世話になつたし、久々の再会だし。

「旦那がお礼まいりをしたいらしいからな」「しねえよ！」

「……でも先輩、ここだけの話ですけどね？」

「なんだ後輩」

「先輩一人の話は、神田先生がよく授業の小ネタに使つてますよ？」「聞いた」

「ここだけの話じゃないな」

「誰から聞いたんですか？」

「「保護者」」

「……最近、妙に嬉しそうなのはそういうわけですか……」「な、何のことだ？」

「旦那、動搖が見え見えだぞ」

「古木とようやく付き合ひだしたんですか？」

「付き合ひてないし、ようやくつてなんだよー？」

「……昔からアプローチかけまくつてたじやないすか

「……そなのか？」

「旦那、少しば氣づけよこの鈍感」

第十四話 恩師

井上と別れ、職員室に着いた俺たちは、生徒の質問に答えている神田先生を発見した。神田先生も俺たちを見つけたらしく、質問を切り上げて俺たちの相手をしてくれた。

「お久しぶりです、神田先生。」こ無沙汰しました

「お久です先生。ああ、別に御茶菓子とかはいりませんよ？ ただ、もしどうしても俺に御馳走したくてたまらないというなら別です。歓迎してくれるというなら、ありがたくその気持ちと品物はいただきましょう」

「御茶菓子とか歓迎とか、そんなこと言つてねえだろ！ いきなり団々しいわ義人！」

「だからいらないって言つたじゃん」

「もの欲しそうな目で見ておいて、よく言つわ！ もりおつりて気満々だろうが！」

「半年ぶりだとこいつの、変わらんなーお前らは」

再開早々バカな言い争いをし始めた俺たちを見て、神田先生は目を細めてそう言つた。俺たちがここに通つていた時期を思い出したのかもしれない。あの時期は……あれ？ もしかして今とあんま変わつてない？ 特に義人とか。

「どうだ？ 高校生活は上手くいってるか？」

「義人を筆頭に、変人の集団に囮まれて窒息死しそうです。何か病原菌を持つているのではないかと、常識人の俺は疑うほどで」

「旦那たちと順風満帆に、楽しい学園生活を送つてるから心配しなくつていいですよ」

「そうか、それはよかつた」

「なんで！？」

「ちょっと先生！？ 聞いてました！？ 悪性のウイルスが蔓延してる北高で、唯一まともだと言つても過言ではない俺が苦しんでる

つて言つてるんですよ！？」

「いやでも血色いいし」

「若いから当たり前です！ 血色とかでなしに中身の方……精神状態がいっぱいいいっぱいのがわかりませんか！？」

「直樹は突つ込みを入れてるときが一番生き生きしとるな」

「そりなんですよ。突つ込みドランキーとでも申しましょうか」

「なるほど、それは重症だ」

「一人して、なに人を病人に仕立て上げようとしてるんですか！」

「だつて、病んでるんだろ？」

「ああ言えばこう言ひ……」

「ところで一人とも。お前らのやり取りとかを授業中ネタに使つてるから。構わないよな？」

「構いますよ！ 他の奴らに聞きましたけど、なんてことしてんですか！」

「そうですよ！」

「義人、もつと言ひてやれ！」

「著作権は俺たちにあるんですから、費用を払つていただかないと」

「そこじやねえよ！」

「ふむ、今のやり取りもネタにさせてもらおつ」

「Hサ」とえてどうすんだ！」

第十五話 じぱっちつ

近況報告から無駄話まで、様々な話をネタに再会の喜びを分かち合っていた俺たちと先生だが、授業開始の時刻が迫ってきた。

「おお、もうこんな時間か。授業始まるから、用事があるなら早めに言ってくれ。なんなら授業後でも構わんが」

「それですね、用事というかお願いというか……」

先生への頼み事を口にすると、驚くことに即断で許可をもらえた。

「いいんですか、こんな簡単に？」

「いいかどうかは、むしろこいつらがお前らに聞きたいくらいだ。どうしてこんなことを？」

「後輩に頼まれましてね」

「……だれかは知らんが、いい先輩をもつたな」

「……というわけで、今日授業を手伝つてもうう、お前らの先輩にあたる直樹と義人だ。質問があつたら俺だけではなく、この二人にも聞くように。この二人は現役北高生だから、中学レベルの問題なら大抵答えてくれるだろう。科目は問わずにな」

神田先生が塾の生徒たちへの説明を終えると、教室はにわかにざわつき始めた。まあ、去年まで同じ中学に通つていて、顔くらい合わせたことがある（義人は良くも悪くも校内では顔が広く、有名人だつたためその人数はかなりの量）だろうから仕方がないといえば仕方がない。保護者に関しては、まるで見てはいけないものを見たかのように口をパクパクとさせてい絶句している。酸素を求める金魚かあいつは。

「ど、ど、ど」

あ、ようやく言葉が出るよくなつたらしい。……しかし、ど？

「……どうしたことですかこれは つ……」

保護者はパニックを起こしていたらしい。起こすのは構わんが、狭い教室で大声を出さんでくれ。響くから。塾にも近所の住人にも迷惑だから。塾がこれで周りとぎくしゃくしたら、どう責任をとるつもりなんだ全く。

「えー、騒ぐな。特に瑠璃。隣の席の宗平が死にかけてるから」
かわいそうに、何の関係もない井上は耳がどうにかなってしまつたらしい。「…………とんだとばつちりだ……」などとぼやいているが、それも当然だらう。犬にでも噛まれたと思つて笑つて笑つて流してもらつしかない。

「流せませんよ！」

おつと、生暖かい目で見守つていたが、井上の方はさすがに理不尽だと感じているらしい。

「確かに宗平には何の責任もないかもしれない。しかしながら、世の中には不可抗力というものがあつてだな……」

「少なくとも今回の事件は防げました！ 先輩が古木に一言前もつて声かけとけばよかつたんですから！」

「ソレハキヅカナカツタナー！」

「嘘だ！ 違和感ありありじゃないですか！ あからさまに不自然です！」

「だつて恥ずかしいじゃないか！」

「その結果がこれですよ！」

それを言われると、ぐうの音も出んな。

第十六話 臨時講師

神田先生の数学は、わかりやすくておもしろいと評判である。俺たちも中学のころには、そのわかりやすい説明で実力を伸ばし、この地域の進学率ナンバーワンの高校 つまり北高への入学を果たしたのだ。もともと、入学するまでは北高が 教師も生徒も変人ばつか な常識はずれな高校であるとは知らなかつたのだが。……それはともかくとして、神田先生が恩人であることには変わりない。「そこで俺たちは、保護者の勉強を見るついでに神田先生の手伝いもできないかと考えたわけだ」

「その結果思いついたのが、このよだな形での授業のフォローというわけだ。理解できたか？」

「……わかりましたけど……」

「保護者がねちねちと不満をこぼすので、詳しい説明に当たつたのだが、どうも保護者には不満があるらしい。」

「……先輩に勉強を教えてもらつ約束は確かにしました。でも、もつとこう違う……なんていうか、もつとこそばゆいような青春のページに刻まれる感じというか、そう言つ感じのを期待してたんですよ……」

「聞きとれんぞ、質問があるならもつと大きな声で聞け」

「……例えば先輩が私の部屋に来て、一対一、マンツーマンでの個人授業をしてくれるとかですね……」

「おーい、聞こえてるか保護者？」

「……いくら教師と生徒という立場とはいえ、若い男女一人つきりで部屋にいるんです。先輩が私の解答の間違いを指摘するたびにかかる吐息。触れあう手と手。ついには我慢をし切れなくなつた先輩が私に襲いかかり……」

「ぶつぶつぶつぶつと、病んでるのかお前」

「……私も多少抵抗はするんですが、所詮男と女の体力差にはかな

わざ、そのまま……。でもでも私もまんざらではなくて、最終的に二人は愛を誓う……みたいな甘々な展開を期待してたのに！」

「わっ！？ 急に大声を出すな！ どうかしてるのかお前は！？」

「全て先輩のせいです！」

「何が！？」

文句があるならはつきりと言つてもらわんと困る。質問がわからんのに答えようもくそもないんだから。

「いいですよ別に！ 先輩にムード作りとかを期待しようつてのがそもそも間違いなんですから！」

「勉強を教えるのにムードが関係あんのか！？」

「あります！ それはもう大いに！ むしろそつちメインで頼んだんですから！」

「……ええー、もう全く意味わかんねえよ……」

理解しがたきは女心と秋の空つてか。

「もういいです！ 先輩！ ここのはどうやって解くんですか！」

「やる気になつたのか？」

「一人つきりが駄目なら、先輩は私に個人授業をしてください！ それくらいいいでしよう！」

「いや、他にも教えるといかん後輩いっぱいいるから」

義人に負担全部押し付けるつもりか。いくら奴でもそのうち泣くぞ。

「先輩……いや先生、質問があります」

「なんだ保護者。わからんのか？」

「どうして私の心臓の鼓動が高鳴つているのでしょうか？」

「心臓に関する病気の疑いがあるな。病院行つて、精密検査受けてこい」

「少しくらい構つてくれてもいいじゃないですか！」

「お前は勉強ができるんだから、むしろ他の奴らに教えてやれ。そつちの方が建設的だ」

「それじゃあ先輩が来てくれた意味がないじゃないですか！」

「そもそも、お前の学力なら十中八九北高には入れる。ケアレスミスとかさえなければ」

そしてケアレスミスに関して言えば、俺の近くにいる義人というアホには遠く及ばないため計算に入れる必要はないだろう。……たぶん。

「じゃあケアレスミスしても受かるくらいまで、私の学力を向上させてください！」

「……ならこの問題でも解いとけ」

このまま押し問答を続けたところで、時間の無駄になるとしか思えないので、問題を押し付けて保護者のもとを去つた。他にも教えてほしい後輩などいくらでもいるはずだから、一人に時間をそんなにかけるわけにもいかんし。

「せんぱーい、ここわかんないんですけどー」

「ああ、ここはまずこっちの角度を求めてからだな……」「なるほどー！」

「そうするとこっちがこつなつて、補助線入れたらもう簡単だろ？」

「わかりました！ ありがとうございます！」

うん、これだよこれ。俺が求めてたのはこんな感じ。決してコン

トをするためにここに来たのではない！

「さあ、わからない問題があればがんがん聞いてくれよー」

「はい先輩、ここがわかりません！」

「保護者以外で」

「教える生徒を選ぶんですか！ 横暴です！」

「お前の質問には一度付き合つてやつたほうが。他にはー？」

「ああ、もういいぞ直樹」

「あれ？ もういいんですか先生？」

「お前が『ごたごたやつてる間に、俺と義人であらかた質問を片付けたからな』

衝撃の事実！

「いやー、義人は教え方がうまくて速いな。教師に向いてるぞ、うん

「それほどもあります」

……俺は、この分野においては義人よりもかなり劣つているらしい。

「先輩、人間には長所も短所もあるんですから、別にいいじゃないですか」

「間違いなくお前の相手をしてて後れをとつたつてのがあると思うけどな俺は！」

「生徒に責任をなすりつけるとは、見下げ果てた教師ですね。先輩は教師になつたら絶対だめですよ」

「別にいいわい！ どうせ教師になるつもりなんてないからな！」

今朝もなぜだか一人の女子が、うちの狭いリビングの椅子に腰かけていた。

「……誰に断つて家に上がつてんだ、お前ら」

「私が許可したに決まっているだろうが、この愚弟が」

……うん、まあそうではないかと感づいてはいたけどね。むしろ確信に近かつたし。

「あのですね、先輩。今日ひやは私の弁当を食べてもらおうと、持ってきたんですよ」

「家庭的な女の子か。奥さんこしたが、たゞ献身的に頼べしてくれただろうね」

その言葉に、保護者は明らかに過剰反応を示した。

「そ、そんな！　奥さんだなんて！　まだ早すぎます！　私たちは清く正しい交際を……」

「まだそんな関係なんぞもつとらん！」

「まだつて！？　なおくん、古木さんのことが満更でもないんじや……」

「そういう意味じゃない！」

「確かに確かに近い将来そういうなる可能性は高いですが、それでも私にだつて心の準備が……」

「お前はいつまで妄想しとるんだ！？」

「ふんふん、それでそれで？」

「姉ちゃんも煽つてるとんじやねえよ！」

ああもう、今日も朝から騒がしい……

「……では先輩、お元氣で……」

「じゃあな」

「……対応が冷たいですよ、先輩」

「たかだか学校に行くくらいで、今生の別れのよつたなセリフを吐くお前の方がおかしいわい」

「テイク2です」

「やり直しだと…？」

「自由なやつだ。義人に影響されたんじゃなかろうな？」

「……では先輩、お元氣で……」

本当に最初に戻りやがつた。……」のままさつきと同じ対応をしたら、テイク3に突入するんだろうな……。

「……また会えるさ……」

無限ループは歓迎できないので、それっぽいセリフを選んでみた。我ながら立場が弱いと言わざるを得ない。

「その、精魂こめて作った弁当を私だと思つて……」

「食べろつてか？」

弁当に感情移入しても、する「」とは一つだろ。

「もう！ なおくんにやらしこよー！」

「ええ！？」

何想像したのこの子！？ 顔真っ赤にしたお前の方がいやらしいよー！

「私、先輩に初めてを奪われちゃいました……」

「なおくん！？」

真っ赤になつていたタツミの顔は、今度は急に青ざめてしまった。また別の想像をしてしまつたらしい。

「初めての手製弁当をお前から渡しただけだろうが！ 誤解を生むよつたな発言は慎め！」

「ちよつとくらーい、いいじゃないですかー。じゃあ先輩、また後で

ー

後でつていつだ。学校行くんだから、今日はもう会わんだろう。

「……なおくん」

「どうしたタシ//。 そんなに近くに来られたら、自転車に乗れん
のだが」

「……本当に古木さんに手を出してない？」

「まだ疑つてたのかお前！-？」

第十八話　日常（後書き）

日常おもしろいですよ。

……漫画の話です。

第十九話 吾輩は

授業も一段落し、やる気がなくなつたらしこ健二さんは、表情を変えずに言った。

「さあ、今日も始めましょうか雑談シリーズ」
ついにシリーズとか言い出したよこの人！ 雜談にシリーズもくそもないだろう！ まあ楽しみにしている人は結構いるかもしれません！

「本日のお題は 吾輩は猫である」

……？

「元千円札が描いたこの小説ですが……」

「わかりやすいけど、それは敬称には当たらんだろ？」

「ねこたんの部分を、自分のことに当てはめて、面白おかしくえてください」

「たんをつけたんを。

「それではさつそくいってみましょ。いえー、ぱふぱふー」
無表情でそれを言つても、盛り上がりに欠けますよ。

「まず清水」

「吾輩は神である」

「玉野」
「いきなりスケールでかいよ！」

「玉野」

「吾輩は模範的優等生である」

優等生は宿題提出を毎回忘れたりしないからー。忘れようとはもつとしないしー

「深谷」

「吾輩は野球部である。レギュラーではまだない」

「一年だしな。頑張れ。

「副会長（女子）」

「吾輩は……キューピッドである」

そう言つて、タツミの方を振り向くとやりとした。……不気味だ。キューピッドとはあんな邪悪な笑みを浮かべるものなのか。

「菅原」

「吾輩はただの男女のカツプリングには興味ありません！」この中に、男同士で付き合つ（物理的な意味で）がいたら私のところまで来なさい！以上！」

なんか混じつてゐるし… それ夏目漱石じやねえ！ 谷川さんだよ！ そして男同士で付き合つ（何を付き合つかは自主規制）関係なんてこの中にはいない！ たぶん！

「次」

「吾輩はこの広い大空に翼を広げゆきたい」

だから何！？ 中学校の合唱か！

「ねぐすと」

「吾輩の今日の朝食はベーコントッグマフインである」

知らないよ！

「つぎ」

「吾輩は両刀使いである」

いた！ 菅原さんが望む人いた！

「剣道部で二刀流を使う人は、吾輩意外にまだない」

違つた！ 意味が違つたよ！ 今俺凄い恥ずかしい」とになつてた！

「次で終わりにしましょ。最後三井」

俺ですか。

「……吾輩はこの学校唯一の常識人である」

「「「ぶーぶーぶー」」」

「大ブーイングですと…？」

どうやら、俺はそう思われていなかつたらしい。

「はいもつと大きな声で！」

「「「ぶーぶーぶー」」」

「つてお前義人！ 貴様が扇動してんじゃねえよ！」

第十九話　吾輩は（後書き）

今まで読んでくださった読者さんには申し訳ないですが、この小説の更新を止めようかと思います。

それというのも、他の小説と比べ文章力がないこともあります、アクセス数は頭打ちになり、他作品と比べての評価が低いことがはつきりしたからです。これ以上こんな気分で書いても面白い作品が書けるとも思えないため、更新は中止させてもらいます。

こんな駄文を読んでくださった方々、本当にありがとうございます。

た。

第一十話　昔話（前書き）

評価欄、ミクシイ、メッセージなど様々な場所での応援のコメント、ありがとうございました。なりかけていた鬱も多少良くなつたので、不定期更新という形でまた書かせていただきます。

第一十話 昔話

「どうしてあんな甲斐性^{みつけせんぱい}皆無鈍感突込男を好きになつたんですか？」
「久しぶりの登場なのに黒すぎない？ 岬。無理があるよ、その読み方は」

中学校からの帰宅途中、親友である岬はとんでもないことを質問してきた。

「いえ、気に障つたなら謝りますが、ルリは成績優秀にして、顔も可愛い部類に入ります。体つきは（失笑）あれですが」

「……持ち上げてから落とすのはやめてくれないかな？ 露骨に失笑されると、さすがの私も怒りを鎮められそうにないよ？」

「失礼しました。体つきは残念ですが」

「真顔で言いなおされるのも、相当腹が立つなあ！ しかもオブラーに包んでたところも言つちやつてるし！」

「あんな鈍感な三井先輩以外でも、ルリなら選り取り見取りでしょうに」

「まあ、確かに告白されたことはあるけど……」

「よければ理由を教えていただけますか？」

「待つた。それなら先輩のところに行つてからにしょい」

「なぜですか」

「……聞えよがしに自分のことを話されたら、先輩でも私の話が気になるでしょう」

「かもしだせませんね」

「そこで聞き耳をたてる先輩に、私の健気さを存分にアピールするつて寸法よ」

「……姑息ですね」

「なんとでも言いなさい。それに、他にも聞きたがつてた人もいるからちょいどいいし」

「他にも……？」

「先輩、お疲れ様です」

「……なぜお前がここに？」

陸トレが終わって、グラウンド（プール兼部室からは徒歩五分かかる）から帰つてみれば、部外者がいる。よくもまあここまで図々しく育つたものだ。親の顔が見てみたい。

「……つてお前が保護者か。うつかり」

「なにか失礼なこと考えてませんでした？」

別に考えてない。なぜなら保護者が保護者なのは自明のことだから。よつてこれは失礼ではない。

「……まあ先輩が無礼なのはいつものことなのでスルーの方向で「お前も失礼だな」

「なおくん、五十歩百歩つて知つてる？ 因果応報とか」

「それで、今日ここまで来たのは昔話をするためなんですよー。」
ばばーん、とない胸を張つて偉そうにふんぞり返つた。

「昔つていつの話だ？」

正直興味がわかないんだが。

「私が先輩を好きになつた経緯です！」

時間を聞いたら内容が返つてきた。日本語は正しく使え。

「……あほか。そんなこと聞きたい奴なんかこの部室の中にはいな

」

「お、面白そうだな」

「……知りたい、かな……」

「それはよかつたよー。＝井のデータは収集しておけば何かの役に立つかもだーー」

この部室にはおかしい奴しかいないのか。

第一十一話 未来

「……それで、この人たちですか、聞きたがってた人というのは。初めてまして。ルリの親友、山本です」

「健三さんの娘さんだよねー、知ってるよー。来年はうちの高校に来るみたいだねー。成績もいいみたいだしー」

「……」

「おお、あの子石井を不審者だと認識したよつだ。あからさまに警戒してる。」

「ああ、健三さんがいつも話してるしな。反抗期で辛いんです、だから今日は授業はここまで。……とか」

「私はさぼりの口實にされているんですか……！」

「なぜだらうか。俺はこの子に近いものを感じる。……苦労人体质、みたいな。」

「もしもーし、いいですかー？ 説明始めますよ？」

「健三さんの愛娘さんー、黙つてもらえるー？」

「人が話をするときは、静かに聞くのがマナーだよ？」

「そうだぞ。来年は高校生ならそれくらいの節度は……」

石井もタツミも義人も聞く気満々だな。そしてとばっちりを受けた健三さんジユニア、ドンマイ。そういう星のもとに生まれついたと思つてあきらめるんだ。俺もそうしてるから。

「……なぜに三井先輩はそこまで達観した表情を浮かべていられるのですか……？」

「それはひとえに経験の差かな……」

まぶたを閉じれば浮かんでくる、不条理に降りかかってくる災難の数々。よくここまで道を踏み外さずやつてこれたものだと思つ。俺つてすごいと思つよ、実際。

「そうですか。それは『愁傷様です。そんな経験頼まれたつて受けたくはありませんが」

「……いや、近い将来、君は確實に似たような経験を積んでいくことになるだろ？……！」

「なんて嫌な予言ですか。迷惑この上ない！」

「顔をしかめ、困ったような顔をする健二さんの娘。だが、彼女は少し誤解をしているようだ。

「予言？ そんな胡散臭いものではないよ。……これは確信だ」「革新……？ 根拠でもあるんですか？」

「動搖したようだな。根拠？ そんなものは決まっている。

「君がこの高校に入学するであろうこと。トライアルメーク保護者が親友であること。そしてそれに耐えうる、日々の培われた精神力。……君も薄々感じてはいるんだろう？……？ このまま奇人にまみれ、突っ込みに明け暮れる日々が来る……！」

「つう……それは……」

認めたくない現実を認めてしまつたのか、膝をつく健二さんの娘。

ふふふ……ここにまた一人、優秀な人材が暗黒面へと……

「なおくん、古木さんの話が始められないから黙つて」

……真顔でたしなめられた。怖い。何気にタツミが、この話に一番興味を持つてゐるんじゃないか……？

第一十一話 回想

「…………。あれは私が小学三年生のころになります……」

当時から よくできる子 として、周囲の大人たちや男子から、ちやほやされていた私は、その実同級生の女子からは妬みの対象とされていました。中学に入学してから出会った岬のような親友もおらず、教室内ではいつも孤立。プライドの高かつた私は、自分から友達を作ろうともせず、ただ無意味な毎日を過ごす生活を送っていました。

しかしそんな私に転機が訪れます。それは言つまでもない、先輩との交流の始まりです。

「ん？ でも保護者とは通学団一緒にいたよな？」

「旦那、低学年の頃から女子と話さなかつただろ？ 旦那には同じ

通学団といえど交流なんてな気には等しかつたじゃん」

「それもそうか。……でも待てよ？ それならどうして俺は保護者

と話すようになつたんだつたつけか……？」

「やつぱり忘れてますね……。いいです。今から思い出させてあげますから」

その日、私は兄のソフトボールチームの観戦及び応援に駆り出されました。興味もなかつたのですが、特にやることもなく、親に兄の弁当を持って行くことを頼まれ、仕方なく行つたというのが実情です。しかし、それが私に大切なものを与えてくれました。

先発した兄と相手投手、二人の好投で最終回まで両チーム無得点

のまま進みますが、力尽きた相手投手を打ち崩した兄のチームが勝利を収めました。しかしその結果が気に食わなかつたのでしょう。兄の妹であると察した相手投手は、私を人目のつかない林の中に連れていつたのです。兄のチームメイトが誰かなど覚えていなかつた私は、兄に呼ばれていると言われ、疑問を抱くことすらなかつたのですからお笑い草です。

「……いや、小三で警戒心バリバリの方が不気味だ」

人間不信にすぎるだろ。同じ小学生同士ならなおさら。

「それでも万が一のことがあつてもおかしくはありませんでしたから。それに小三の頃の私から見れば小六男子は大人に近い存在でしたし。本当に危なかつたんですよ、その時は」

その男は大声でがなりたて、私の髪をつかんだ上、強い力で引っ張つてきました。男女の力の差、小六と小三の体格差もあり、私は抵抗らしい抵抗ができませんでした。周りに人などいない。助けを求めても届かない そんな恐怖感も手伝つて、私は惨めにも泣き出してしまつたのです。

「しかしそんな絶望的な状況の中、ヒーローのように現れたのが先輩だったのです！」

「…………」

なんだろうか。うつすらと思いだしてきたような……。

第一二三話 守護

涙でかすむ私の目の前に颯爽と現れた先輩は、敵わないことを知りつつ勇敢に立ち向かいました。しかし小学生の二学年差は、当然の如く先輩を苦しめます。先輩は顔や腹、体の至るところを殴られ、蹴られるなどの暴行を受けます。それでも、倒されても倒されても幾度となく立ち上がる先輩にいら立ちを覚えたのでしょう。その六年生は先輩にこう問いかけます。「なぜそこまで無謀なことをするのか」と。すると先輩はこう答えます。「女子供は男が守るものだろう」「うう

「涙で曇つてはいましたが、その時の先輩は輝いて見えました。その時に思つたのです。私はこの人に着いていこうと」

「ふーん、そんなことがあつたのか」

「杉田君も知らなかつたのか？」

「俺はソフトボールはやつてなかつたしな」

転校初日からうちに来るような、天上天下唯我独尊幼なじみ義人でも、接点がないところはあるのである。大体その時つて……

「で、その後はどうなつたの？」

「私は巻き込まれ、気絶したのでその後の展開はわかりません。しかし再び目が覚めた時にはその六年生はもうおらず、傷ついた先輩だけが残されていました」

「…………」

「まだ髪が少し痛みましたが、それ以外私に目立つた外傷はありませんでした。きっと先輩が守り抜いてくれたんでしょう」

「…………」

「あれ、どうした旦那。急に黙っちゃつて」「嫌なことでも思い出したー？」

……ええ、その通りですとも、はい。

「実のところどうだつたんだ、田那？」

それは。

「……手も足もでなくて、死にかけたところを救つてもらつた……」

「ああ、大人に？」

それならどれだけよかつたものか。

「……うえ」

「ん？ なんだつて？」

「……親愛なる姉上様に救つてもらつた」

その小学六年生は、心と体に大きな傷を負つてお帰りいただきました。……以前そいつとふ偶然すれ違つた時の恐怖の表情は忘れられない。きっとトラウマになつてゐるんだろうな……。

「よかつたじやん

「よくねえよ！」

貴様は女の子一人守りきれんのか、とむしろそれまでに負つた傷よりも、姉ちゃんの拷問の方がダメージが大きかつた。……あれがキレたら、夜叉も裸足で逃げ出すんじやなかろうか。俺は足がすくんで逃げることすらできんだらうけど。

「……あ。そういうえば、田那はなんでそもそも人気のない林の中にいたんだ？」

「む、そうですね。どうしてああも都合よく登場できたんですか？」

「……」

「答えられないの一？」

人気がない、人から見られることのない場所ですること と
なれば答えは一つ。

「……立ちショーンしてた」

「……」

「……」

……五人の冷めた視線がいたたまれない。

旅は順調に進み、俺たち勇者一向は、魔王退治のためレベルを上げようと必死で努力していた。俺のレベルが十一、ヨシトのレベルが十五、イシイのレベルが十四であり、まだ魔王に挑むには力が足りない。俺たち三人は勇者として困った人を助けながら……。

「つておい！ 一人足りない気がするぞ！？」

「旦那のレベルが一番低いことには触れないんだな」「うるさいわ！」

くつ、人には誰にでも触れられたくないものがあるというのに、空氣読めよ。スルーしろよ。俺の名譽を保たせろよ。

「大丈夫だ旦那。旦那のプライドなんて塵に等しいから」

「無礼この上ないこと言ってんじゃねえ！ 経験値だけ稼いでほとんど戦わなかつたお前らのレベルが高いなんて詐欺だろ！」

「人生なんてー、そんなもんだよー。要領よく立ち振る舞つた方が勝ちつて言つかー」

……ちくしょう。かなりムカつくな、このシステム。

「それはさておいてだ！ ケンゾー（最強の遊び人）はどうに消えた！？」

いつの間にいなくなつてたんだ！？

「ああー、ケンゾーならー、「職場環境が悪いので辞めさせていただきます」とだけ言い残してー、帰つてつたよー」

「そんな簡単にパーティつて抜けられるもののかー！？」

衝撃の事実である。俺に何の相談もなしにパーティから抜けられるとは。そんなにカリスマ性がないのか、俺。そしてバイト感覚だつたのか、健三さん。

「勇者一向への勧誘の文章は 世界のためになる、やりがいのある職場です とかだつたからな」

「ずいぶん怪しい勧誘だなあ、おい！」

怪しそうで、そんなとこ普通の感性ではいこうなんて思わないだろ！ 文章考えたやつ、どうかしてるってのー。

「自分の実力が上がっていくのが実感できます とも」

「そりゃあレベルが数字として表れるからねー」

「事実ではあるが、魅力が感じられん。

「でもー、このまま三人でパーティを組むのもおかしな話だよねー。」

「四人で組んだ方が楽だしー」

「勇者と遊び人三人つていう今までのパーティも十分おかしかったけどなー！」

「なら、次の街で新たなメンバーを探すことにするか。それでいいか、旦那？」

「次の街への道中で、レベル上げも兼ねてな」

「一番レベル低いのはミツイだけだねー」

「それを言つなー！」

しつこい奴め。

「いいんだよ！ これから俺はガンガンレベルを上げてやるからー！」

「一緒に行動している以上、俺たちのレベルも上がるわけだが」

「しかもー、このままのペースなら僕たちの方がずっと早くレベル

が上昇するしねー」

「……遊び人のくせに」

第一十四話 勇者ミシイの冒険～離脱編～（後書き）

久しぶりの投稿です。一ヶ月も更新なしですいません。なぜか今さらフューチャリトルバーズEXにはまつていたもので……。恨むならゲームを貸してきた友人一人を恨んでください。

……いや本当にすいません。

第一十五話 続・勇者//シイの冒険（前書き）

十時間耐久カラオケで変なテンションになりました。 今後は自重せねば。

第一十五話 続・勇者//シイの冒険

旅を妨害する様々なモンスターを退け、俺たち勇者一向は新たな街へとたどり着いたのだった。

「いやー、三人のパーティだと戦闘はきついねー」

「そうだな。まともに戦えるのが旦那だけってのが問題なんだよ。構成をもつとよく考えるべきだったんだって」

「……貴様らがそれを言つか……」

敵モンスターを挑発するだけしておいて、実際の戦闘では計算できないお前らは、めんどくさい存在である。

「たまにダメージを与える時もあるじゃん」

「確かに。無駄にすばしっこいササキとかいづモンスターを、トルンプを手裏剣にして倒したのには驚愕した」

「それだけでも僕たちを雇つてるかいはあるよねー」

「……すさまじく割に合わんよ」

「ああ、もつと俺の力になつてくれる、まともな人材はおらんのか……。

「……い、嫌です……やめてください……」

「ん？」

三人で話しながら歩いていると、大通りからは少し外れた道から、今にも消え去りそうな声が聞こえてきた。

「おい、一人とも。なんかきな臭いぞ」

「これは行つてみるべきだな」

声のした方に向かうと、そこは薄暗い袋小路だった。そこには、一眼見ただけで襲われかけていたとわかる、白い服を乱された一人の女の子と三匹の変態がいた。

「ヨシト、イシイ、やるぞ！」

「りょうかーい」

「御意ー」

「……はあ、はあ……」

「なんとか一匹は倒したものの、一いちも深手を負つてしまつた。
……それというのも、ダメージを受けやうになるたびに俺を盾にして
くれやがつた、遊び人一人がいるからなのだが。

「……薬草は？」

「むしゃむしゃ」

「ばぐばぐー」

「てめーら大して傷を負つてないのになけなしの薬草使つてんじゃ
ねえ……！」

ドス。

「ぐはあー！」

突つ込んでる隙を狙われ、俺はまさに死の寸前まで来てしまつた。

「……もうあの王に馬鹿にされたくないってのに……」

死ぬたびに「情けない」などといわれるのは、もうまつぱり「め
んだ。しかしこのままでは……」。

「……」

「！？」

何か声がしたと思った次の瞬間には、重かつた体が軽くなつた。

「つあああああー！」

急に傷が治つたことを考える間もなく、襲つてきた最後の一撃を
返り討ちにする。なんとかこれで死は免れたようだ。

「……しかしなぜだ？」

「その理由を推測するにだねー」

薬草を食つて血色豊かな遊び人が解説しだした。……こいつら、
いつか絞める。

「君がやつたんだな？」

「……はい

そうして返事をしたのは、先ほど襲われていた少女だった。

第一十六話 続々・勇者ミシイの冒険

危険が去つたので、質問タイム。

「いえーどんどんー」

「ぱふぱふー」

「やかましいぞ遊び人ー号とー号」

あー、鬱陶しいことこの上ない。ここにつけば真面目な話をさせようという気がないのだろうか。

「なあ、俺が一号だよなー?」

「僕が一号に決まってるよねー、勇者ミシイー」

「ええ!? そこに食いつくのか!??」

しかも一人揃つてとは、シンクロ率何パーセントだ。ビンビンのロボットにでも乗つて、使徒を倒してくれればいいの?。……あ、魔王を倒す旅の途中か、俺たちは。

「……ヴァはロボットじゃないんだけど……」

「ん? 何か言つたか謎の少女」

「……なんでもないです」

そうか、俺の変人センサーが反応したように思えたが、気のせいだつたか。……ここ最近、フルで作動しちゃなし(つまりは出会う人間すべてが変人)だつたため、バカになつたか。こんな娘が変人なわけないよな。

「それで、お前はいつたい何者だ?」

回復させてくれたことから見ても、罠でなかつたことがわかる。だからといつて的でないといきるには早い。何が起こるかわからぬこの世界、石橋を叩いて渡るくらいの気概は必要だ。

「旦那は細かいことを気にしすぎなんだよ。仲間にならないか」

途中いろいろ端折つて勧誘しちゃつた!

「え……? あの……? はい……?」

「動搖するのもわかるけどねー」

黙れ。お前らが動搖などするはずもないだろう。だから動搖したくなる気持ちなどわかるはずもない。

「……私は一体何をしたら……？」

「そうだな、とうあえず……」

「魔王を倒そつ

「ええ！？」

だから話題をややこしくするんじゃねえよ！

「……なるほど。お前はタシミで、職業が白魔道士見習い。パーティが壊滅状態にあって、からつじて逃げ出したものの追い詰められていた、と」

「私はまだ見習いで、敵を倒すとかそういうことはできないんです……」

「しかしあの回復魔法は効果観面だつたな」

「うんー、うちのパーティに来れば即戦力間違いないよねー」

「役立たずが一人いるからな」

「おやおや、手厳しい」

「なんか腹立つ。

「まあ、よければ一緒に旅に来てくれないか？ もちろん強制じゃないが」

「……」

「ただ、俺個人の希望としては一緒に来てほしいかな」

「……はい、そこまで言ってくれるなら……。一緒に行きます」

「ほほを染めつつ、パーティに加わることを承諾してくれた。これからこの旅が少し楽になるかも知れない。

「ミツイは しうづじょ をてにいれた！」

「なんだそのいかがわしい言い方！？」

第一十六話 続々・勇者//シイの冒険（後書き）

感想でおだてられて小説を書く自分。……あれ！？ 上手く乗せられてますか！？

第一十六話 属性（前書き）

忙しいのになぜか投稿です。暇な時には書かないのに……アホですね。

第一十六話 属性

小倉先生の監視下で、今日の筋力 + 陸上トレーニングが終了した。
最近は筋肉痛のひどさが以前より辛くなくなっているとは……。
いや、痛みに耐えられるようになつただけなのか？ それとも俺は
Mなのか？

「おーい、旦那どうした？」

「……いや、何でもない」

大丈夫だよな。昔から外傷には慣れていたものの（姉といつ名を
もつ人外生命体の日常的な暴力のため）、それを喜びに感じるよう
な変態には育つていない。

「どうしたのー？ そんなに疲れたー？」

「……まあ、いろんな意味でな」

「それはちょうど良かつた」

「……？ それはどういう……？」

そう言いながら部室に入ろうとしていると、
「……お帰りなさい先輩……だにゃん！」
頭にネコ耳を付けたバカがそこにいた。

「……」

「……先輩？ どうかしたんですか……だにゃん」

「……」

「大丈夫ですか……だにゃん」

無言で振り返ると、目をそらしつつ口笛なんぞを吹く馬鹿一人。

「……お前の頭が大丈夫か、保護者……」

昔から変な奴だと思っていたが、ここまでもおかしかつたとは。
「え、でも杉田先輩と石井先輩が「旦那は動物が好きなんだ。特に
小動物」「古木さんー、このネコ耳カチューシャを貸してあげるよ

「……。意味はわかるねー？」って言つから、つい……」
ついじゃねえよ。

「……貴様らには、俺に平穏を『与えよ』といつ優しさはないのか……？」

「まったく心外だな」

「僕たちなりの優しさだったのにー」

部室に来るなりどつと疲れが増したのにか。これがあれか、互いの感情がすれ違う状態つてやつか。

「それで先輩、どうです……？ 似合つてますか……？」

「どうもこうも俺に変な属性はない」

「でも動物が好きつて……？」

「それは事実だがそれとネコ耳とは越えられない壁がある！」
なぜそこを同一に扱うのだろうか。俺はネコ耳萌えーはあはあとが言つてる一部の特殊な人たちと同一視されてるのか。

「……だとしたら早急に改善が必要だな……」

「……あれ、先輩……？ 怒つてます……？」

さあどうだろうか。

「あ、あれー？ どうしたの三井ー？ 襟首なんてつかんでー？」

「そうだぞ旦那、暴力はいかんぞ？」

「貴様ら三人、黙つてそこに正座しろ」

お前らには俺がいかにまともな人間か分かつてもらうため、じつくり話を聞いてもらわんとな。……別の名を説教とも言つが。

「……というわけだ。わかつたな？」

「ハイワカリマシタ」

「……先輩は常識人です……」

わかつてもらえたようでなによりだ。

そして後日。

「 なおくん、どうかな だわん」

「義人、石井
つ！！」

「え！？ ネコがいけなかつたんじやないのか！？」

「それがねえよ……」

第一一十八話 作戦会議

とある秋の昼下がり。女子数名で騒がしい机周辺にて。

「辰美つてさー、三井君のことが好きなんだよねー？」

「……うん、まあ、そうだけど……」

「それにしてもアプローチが弱いと思つんだよね、押ししが足りないよ押ししが」

「そうそう、よく言つてしまよ？ 押しが駄目ならもつと押せつて」「そこには引けうよ、ね？」

「その結果、現在に至つてゐるんだからね？」

「それを言わると弱いんだけど……」

「だいたい三井君もあれだ、こんな可愛い子が消極的ながら迫つてゐるのに、付き合つおつとしないなんて……やっぱり杉田君との噂は事実なのかな？」

「それはないよー。たぶん……」

「まあよく聞かれてるけど、断固として認めないからねー」

「……その言い方だと、なおくん×杉田君は確定事項なんだね……。

認めてないからって……」

「それはそうでしょうー。でも杉田君×三井君かもしれないけど」

「いやいやそこは……はつ！？」

「どうしたの？ ここから議論が始まろうかとこりこりで……」

「待つて！ これは罷よー。私たちは今何をしようとしていたのー？」

「何つて、受け攻めの議論を」

「そこがおかしいのよー。そもそも私たちは辰美を三井君とくつつけようと集まつたんじゃないのー？」

「……そこは盲点だったわ……」

「……あの、ただ雑談してただけで、私となおくんが付き合つとかそういう話しあいでは始めからなかつたような……」

「恐ろしい罠ね……こうやつて魅力的なネタをちらつかせておく」とで、第三者の深い介入を防ごうとしていたんだわ……」

「敵ながら巧妙な手口ね。感服するわ」

「……いつの間になおくんが敵に……？」

「だけどその程度の罠に引っかかる私たちじゃないわ！」

「自分で勝手に罠を作つて掛かつてる感じが否めないんだけど……」

「……だけど、三井君はどんな子が好きなんだろ？？」

「そうね、辰美は何か知らない？ 好みのタイプ」

「……そんなこと恥ずかしくて聞けないよ……」

「ピュアだなあ辰美は。日常会話……むしろあこがつで聞けるレベルだよ？」

「そんなことどうやって……？」

「「おはよう三井君、杉田君とはどっちが受けなの？」って感じで「質問内容変わってる！」

「おつといけない、また罠にかかるといひだつた」

「まあそれはともかく、簡単だつて。聞いてきなよ」

「今すぐ！？」

「善は急げつて言つでしょ？」

「でもでも、心の準備が」

「大丈夫だつて！ 性癖まで聞けとは言わないから…」

「もともとのハードルが高いよ！？」

「だから聞かなくていいつて」

「あーもう、もどかしい… 私が言つて聞いてくる…」

「ああ、ちょっとー……。辰美の練習にもなつたのに……」

「……そんな直接的な質問、もしそんぜん違つ……美人なお姉さんが好きだつたら立ち直れなくなるよ……」

「心当たりでも？」

「……なおくんのお姉さんがそんな感じなんだよ」

「システムじゃなけりや大丈夫だつて……お、帰ってきた」

「聞いてきたよー」

「で、詳細は？」

「俺はホモでもバイセクシャルでもねえ！」だって
「また質問内容変わってるよー。」

第一一十八話 作戦会議（後書き）

明日明後日と二日続けてプレゼン発表。忙しい時に限って書くのはアホですね。我ながらよくわかりません。

第一十九話 専門家（前書き）

感想を頂いたので、ひつわりと書きました。
それではどうぞ。

第二十九話 専門家

「敵を倒すにはまず、敵の情報を集めなければならない！」

「おおー！」

「……だから何でおくんが敵扱いに？」

「最終的には辰美が墮とすからに決まってるでしょ！うが！」

「明らかに不穏な言葉が聞こえてきたんだけどー！？」

「ということは、彼奴の弱点を知るうと悪い！」

「どうやって？」

「それはね……」

「専門家の皆さんをお連れしました」

「どうも、田那の知識に定評のある杉田です」

「同じくー、三井行動研究家ー、石井ですー」

「いや知ってるけど……」

「でも辰美、私たちよりも三井君のことを知っているのは確かでしょ？」

「それはまあ……」

「そうだよー、僕たちがついているからにはー、大船に乗った気分になつてもらつて構わないよー？」

「タイターツク号に乗つてる気分で優雅にしていくれ

「沈むといいたいの……？ 不安を駆り立てるような……」

「じゃあサントアンヌ号」

「ポケモンー？」

「じゃあー、咸臨丸ー」

「イッシー、何それ？」

「勝海舟が船長をやってたー、江戸末期に外国に行つた船だよー」

「勝海舟つて？」

「子供のころー、犬に金 ま嗜みつかれて死にかけた人だよー」「全く凄い人だと思えない！？」

「……いや、女子がこれだけいる中で、そんなはしたないこと言わないでよ……。もつとオブラートに包むとかさ……」

「じゃあー、睾丸ー」

「…………」

「もういいや、どうしてここまで話が脱線したんだろう……？」

「ともかく、旦那の趣味嗜好に関して言えば、俺たちほど詳しい人物はいない！」

「…………その割にはこの前失敗したよね……」

「その件についてはー、忘れるのが吉だよー」

「そうだワン」

「…………忘れさせる気ないでしょ？」

「ワンー」

「ワン」

「辰美、顔真っ赤にしてどうしたの？ そのワン、つてのに何か関係が？」

「…………後生だから聞かないで……」

「第一回、旦那に好かれるためのイメージ作り会議ーー」

「わーわーわー」

「…………」

「さて、旦那が好むものの傾向だが……」

「明らかに引いてるのにスルーした！？」

「旦那は王道を好んでいるんだ。あれでも

「王道？」

「そう王道……。しかも悲劇じゃない、ハッピーエンドな感じの王道だ」

「…………それが何か関係あるの？」

「やうだよー。そのためには、石川さんには性格矯正を行つてもううよー」

「性格矯正……？」

「それではこの台本を手に取つて

「？」

「こんなセリフが違和感なく出るようにして、旦那に突入するんだ

「……ええ！？ 何このセリフ！？」

「さあー、頑張つてー」

「これがいい結果を生むとは考えられないんだけどー。」

「成せば成る」

「たぶんならないよ！」

「やらなかつたら映像が流出するかもワソ」

「最終的には脅迫！？ ただ面白がつてるだけじゃー。」

「……」

「……」

「せめて否認の意志は示してよー。」

第三十話 実行

昨日義人から「明日は旦那一人で歩いて登校しろよな、俺も石川さんも用意あるから（笑）」とのメールが来た。その文章のどこに笑える要素があるというんだ。あれか、馬鹿にしてるのか。「俺たちはお前と違つて忙しいんだ、いいよな暇な人は。うらやましいぜ（笑）」的な（笑）なのか。そうだとしたら義人とは一度じっくり話し合う機会を設けないといけない。

まあ、それはさておき今日は久々に一人で、しかも歩いて登校する。義人の命令に従うのもバカ臭いが、常日頃はよく話す奴らがいるので、こういう機会は珍しいかもしれん。じつくり登校するかななどと考へ、徒步通学したのが運の尽きだつた。……もともとあつてないような運なのが悲しいところだが。北高への道を半分ほど行つたところだつた。

「い、いつけなーい。ちこくちこくー」

……よく聞き覚えのある声が、物凄い棒読み（これ以上はないほど。例えるなら声優経験のないアイドルが外国映画に吹き替えたレベル）で聞こえてきた。

「……何やつてんだ、タツミは……？」

用事があるんぢやないのか？ それとも、それで遅刻だと騒いでいるのか？ そんなことを思いながら声がした曲がり角付近に行くと、

「えい！」

「ぐはあ！？」

なんか勢いよくぶつかつてきた！？

「……何してんだお前は……」

ぶつかつた拍子にタツミから飛んで行つたものを見て、一瞬思考が停止する。

……なぜに食パン……？

「…………」

「…………」

よし、状況を整理してみよう。

1 義人からメールがきて、一人で学校に歩いて行けと指定される。

2 指示通り歩いて行くと、いないはずのタシミの声（棒読み）がする。

3 見に行つたら、激突。

4 周りには食パン。

なんだこのカオスな状況。

「…………あつ、い、いつたーい、どじ見てるのよー」

「…………どじって、まあ、お前を見ようとしたんだが（あまりに不審だつたから）」

「えつ、私を…………見よひと…………？」

いや別に深い意味はないが。

「それはそうと、急いでるんじゃないのか？」

ちじくちじく、と声に出していたくらいだ。理由は知らんが何があるんだね？

「そうだね…………うん、行つてくる…………」

何と無くボーッとした状態のまま、タシミは学校へと向かっていった。

…………あまり急いでいるように見えないのは僕のせいなのだろうか。

「まあ、とりあえず…………」

こんな不自然なことが起つるのは、馬鹿が暗躍しているからだろう。悲しいことに今までの経験から、それはほぼ100%なのである。

第二十一話 趣味

登校後。教室にはすでに、例の一人が来ていたので質問を浴びせてみる。内容はもちろん今朝のタシミの言動についてである。

「義人、少し話があるんだが」

「俺は何もしてないぞ」

「……」

「石井、お前にも」

「僕は何も知らないよー」

「……」

「なぜこいつらはこうなんだ……。」

「……正直に答えろバカ」

「おいイッキー、大変だ。旦那の語尾がバカになってしまったぞ」「これは一大事だねー。」のままじゃ面接試験の時に「趣味は何ですか?」と聞かれたら「街頭で配っているティッシュをいかに多く攝取するか記録を競うことですバカ」となつてー、面接官の印象が悪くなっちゃうよー」

「バカって言つたのはお前らに対してだ! 語尾じやねえよ! しかも趣味は何ですかってお見合いか!? ティッシュ配りの攝取なんて趣味にしてるわけじゃねえよ! 使えるただのものは断らない主義なだけだ!」

「使えるとはいやらしいな、旦那」

「ティッシュをそつち方面と絡めるんじやねえよ!」

「わー、三井が怒つた」

「逃げるぞイッキー」

そう言い残して、無駄に素早い動き（机があるにも関わらずの高速移動）で廊下へと去つていった。

「行つてしまつた……」

しかしあの様子では、あいつらが関連しているのは間違いないだ

るつ。問題は中身だから、現状問題が何一つ解決していないのは恼ましいところだが。

「…………」

「…………」

「…………？ なぜだろうか、今日は妙に見られている気がする……。落ち着かない……。」

「三井、何があつたのか？」

「…………災難？」

「なんだ、いつものことか」

「原君の対応が冷たい。」

「杉田君に石井君、朝言われたとおりにしてみたんだけど……」「どうだつたー？ 三井の様子からしてー、若干効果はあつたみたいだけど」

「いい効果か悪い効果か、それが問題だ」

「…………つんでれ、つていいものだね……」

「好感を持ってもらえてなによりだよー」

「うんうん」

「…………でもな、実際はそれを自然にできるのが一番なんだよ」「そんな人いるのー」

「数少ないが、いるのは事実だな」

「…………へくしつ」

「どうしたのですルリ、風邪ですか？」

「おかしいな、別にそんな兆候はなかつたけど」

「なら噂でもされてたのでしきうつか」

「…………先輩が私を恋しくなつて、噂したとかー?」

「その確率は低いと思いますが」

「うねるこー、わがとんのー、」
「じまんのこー、うとじまんのうがつよ、うか」

「へこつもとは一味違う私で勝負！ 田那をベタベタな展開でどうにしちゃえ大作戦！ 第一段！」

「作戦名長じよ！ しかもそんなに大声で言わないで恥ずかしいから…」

「じゃあー、略して プグラ作戦ー」

「どうしてその三文字を選んだの！？」

「…………」

「はつ！？ ふもげもらもわっさの作戦名に入つてない！？ ちつとも略になつてないよー」

「細かいところを気にしたら負けだよ、石川さん」

「せうだよー、大らかにいじつよー」

「……気にしたら負けなの？」

「やつやつ。だから今回の作戦の説明に移るよー」

「…………」

「わかつた」

「聞きわけがよくて助かるな。では作戦だけど……石川さんは田那を体育倉庫の中に連れ込んでくれ」

「…………？」 で、そうしたらどうするの？

「そりだな、それから先は……石川さんは知らなくていい」

「どうしてー？ そこ重要じやないー！？」

「石川さんが作戦の中身を知つてしまつと、田那が気付いてしまつかもしれない……とこつことにしておいつ」

「付け足された言葉のおかげで台無しだよー！ 何か企んでるでしょー？」

「まあまあー、悪いようにはしないからー」

「せうだよ辰美ちゃん、一人の言つとおりにしておきなつて

「悪いよつにしないつて言つてるじやん？」

「いやいや笑いながら説得しても逆効果だよー、楽しんでるー！？」

「この状況を楽しんでるでしょ！？」

「そんな」となじよ……くふふ

「耐えきれてない！　誤魔化しきれないからそんなんじゃ！」

まあまあ、俺たちの運がいいからこいつが悪いんじゃねえしな

「から」

「……………とにかく、あなたたちを全てにしてしまったんだが、…………」

「那也是哪？」

神様は騒動が好きなんだね……」

卷之三

「用事は二つある。」

用事と言えは用事なんだけど

誰が悪しな
何かあつたのたゞ

「体育倉庫に一して来てくれない?」

別に構わんが」

おれらが、小倉さんあたりに手伝いでも頼まれたのだろう。それなら一人でやらせるのも可哀想だらう。それに、今手伝つておけば、今度俺がやらされた時、手伝つてくれるかもしれん。

「じゃ、行くか

「……なんかごめんね、なおくん」

「気に入るな」

……タツミよりも、「じつかり！」とか「頑張れ！」などと声を

かける女子連中のほうがよっぽどか気になるし。

第三十一話（後書き）

「みてみん」というサイトに、ええじゃないかの紹介四コマ載せました。時間が余つており、絵が下手でも笑わない人だけ見てみてください。

第三十二話 圈外（前書き）

あけましておめでとうございます。今年もええじゃ ないかをぶつぶつ
よろしくお願ひします。

体育倉庫に着いたものの、実際何をすればいいのか聞いていいなかつた俺。ある意味間抜けだ。

「さてタツミ、俺はいったい何をすればいい？ 掃除か？ それとも何か用具でも出せばいいのか？」

どうせ小倉さんから頼まれたのだろうから、仕事はここの辺のはずだ。以前にも何度か強制労働させられたし。

「えっとね……その……」

言いよどむ様な事か？ まさか一人でそこににある跳び箱（手段）を運べとでもいうのだろうか。一遍にやれと言われても無理だぞ。俺はひ弱なんだから、力仕事ならラグビー部の連中にでも頼んだ方が得策だ。

「あの……ね？」

「なんだ！？」

タツミが何か話そとすると同時に、周りが見えなくなつた。いや、これは……。

「扉が閉まつたのか……？ 中を確認もしないで閉めるとは常識のない奴だな……。おーい！ 開ける！」

ドンドン、と扉を叩いてみるも応答はない。閉めるだけ閉めてどこかに消えたようだ。何ともはた迷惑な話……。

「ついてないな、メールで誰かを呼ぶか……つて圈外か！」

さすがに倉庫の中でアンテナが立つほど、ドコのサービスは充実していなかつたらしい。

「タツミはどうだ？ 携帯、アンテナ立つてないか？」

「……もしかして……というか、これだよね……杉田君たちが言つてたの……」

「おーい？」

「でもこれはやりすぎじゃないのかな……？ でもチャンスと言え

ばチャンスだし……」

「もしもーし」

「真つ暗闇の中一人きつ……」

「聞いてるか?」

「なおくんと……」

「ちょっと話を聞け!」

「うわあ!/? い、いやらしい」となんて考えてないよ!/?

「そんなこと聞いてねえよ! 携帯、アンテナ立つてないか!/?

「あ、アンテナね、ちょっと待つて……立つてない……けどメールが來てた」

「倉庫に入る前だな、そのメールは」

しかし、ある意味いいタイミングかもしれない。返事がないことを疑問に思つて、誰かが探しに来てくれるかもしれないからな。

「 つ……」

「どうした?」

メールを見た途端、携帯を叩きつけるように閉じたその仕草は、まるで見てはいけないものを見てしまったかのようだつた。今暗くなれば、表情も読み取れたのだろうが、残念ながらそれもできない。

「なんでもない!」

なぜ威嚇行動に出る。一体俺が何をした。

三井には知る由もないが、タツミに届いたメールにはこう書かれていた。

「旦那もヘタレとはいえ男であり獸!けだもの これを機に一段階先に進め!

! b ソラ美を応援する女子の会&旦那で楽しもう会」

「静かだな」
「……そうだね」
「暗いし」
「……」
「何か起こりそうだよな……つじじうした?」
「な、何が?」
「何がつて……何故に俺から距離をとる?」
明らかに離れているのに、何がもなかうつ。
「いや、だつて……二人きりだし……」
「二人きりだな」
「誰もいないし……」
「二人きりだからな」
同じことを繰り返されても。
「だ、だから……」
「だからなんだ。問題があるなら、まつきりと言つてくれ。頼むか
ら」
察するのは得意な方だと自負しているが、情報が少なすぎるの
で答えは出せない。
「その! なおくんがムラムラしだしたら、私には逃げ場所がない
わけでね! ?」
「……ムラムラ、ておい。」
「あのその、なおくんを信用していないわけじゃないんだけどね! ? なおくんが男の子であるのも否定しがたい事実であつてそういうのはもうちょっと段階を踏んでからと/or>うか正式にお付き合いし
だしてからと/or>うかまさかこんな事態になるとは思つてもみなかつ
たというか! 」
「落ち着けタシ!!。妄想が駄々漏れになつてゐるぞ」

暴走したタツミの言葉を意訳すると、意外と信用が低いことが判明した。ちょっとへこむな……。仕方のないことだといえ。

「ああもうどうしようつー。杉田君も石井君もみんなおもちゃにしるるとして思えないよ……！」

「待て。やはり奴らが絡んでいたか」

「あ……」

タツミが嘘をつけない性格で助かった。義人が絡んでいるなら話は早い。

「……出てこい馬鹿野郎。十秒以内に出てこなかつた場合、俺は貴様に報復処置をとる。十

「すいませんでした」

「早つ！？ そしてなんでそんなところに！？」

当然見てたんだろうとは思つたが、飛び箱の中に隠れていたとは予想外だ。

「……さて、言い訳を聞こつか」

「興味本位でやつた。反省はしていない」

「随分ふてぶてしいなおい！」

悪いことをした自覚などないのだろう。……大多数が楽しむためなら少人数を犠牲にする男。それが義人だ。

「でも杉田君！ 実際何かあつたらどうするつもりだつたの！？」

「それは大丈夫だ」

「どうして言いきれるの！？」

「旦那のへたれつぶりは全世界が認めるほどだ。やれる甲斐性があるわけがない」

「……貴様そこになおれ、教育し直してやる

誰が甲斐性なしだ馬鹿。

その後、計画を洗いざらい話させた上で、石井とともに一時間近い説教をくらわせてやつたのだった。

……効果などないのだろうけど。

「旦那、ドラゴンつているよな」
「お前の脳内にはな。実在はしないだろ」
「藪から棒に。何を言ってくるんだこいつは。
「言い方を変えよう、龍つているよな」
「訳しただけじゃねーか。で、なぜにそんなことを聞く?」
本当に言い方を変えただけなのに呆れつつ、尋ね返してみる。
「旦那は親に、質問を質問で返すよう教わったのか?」
「……とりあえず殴つていいか」
ストレス解消には、義人をどうにかするのが一番手つ取り早い気がする。
「冗談だ冗談、旦那は頭が固いなあ。そんなんじゃ彼女できないぞ
……つてすでに一人候補がいるな、はつはつは」
「……そういうことを言つんじゃない。俺だつて悩んでるんだから
な」
「世の中のもてない人類に暗殺されるぞ。クラスで言つなら清水み
たいな」
「あの暑苦しいのが集団で攻めてこられたら、生きて帰れる保証は
ないな……。大体、義人はどうなんだ。お前だつて彼女はいないだ
ろ」
「何言つてるんだ。俺には彼女いるぞ?」
「何!?」
「そうだつたのか!? そんな気配感じなかつたぞ!?」
衝撃の事実発覚である。義人のことなら大抵知つてているつもりだ
つたので、かなりショックだ。
「水くさいな、そんなことなら今度紹介してくれよ。いやー、あの
義人が……」
「わかつた。なら今日にでもうちに来てくれ

「……？　どうして義人の家じやないといかんのだ？」

「いやー、俺の彼女は恥ずかしがり屋で、画面の中から出でこないんだよ」

「ところで、龍は各地で伝承が残つてゐらしいな。案外、昔は恐竜以外にもそういうのがいたのかもしれん」

「強引に話を戻した！？　そして俺の彼女はスルー！？」

やはり義人だった。このアホさは間違いなく俺の知つているものである。だから一々突つ込むのも面倒なので、華麗にスルー。

「まあいいや。龍つて……あれつて、爬虫類なのか？」

「……飛んでるし、鳥なんじゃないか？」

「確かに。恐竜は鳥に進化したって説もあるくらいだしな」

「へー、そうなのか」

相変わらず博識だ。それなら俺に聞くなよ、とも思うが。

「だが、いろんなドラゴンの絵は間違いなく鱗があるじゃん。あれはワニに近いものがある」

「言われてみればそうだな。うーむ、そう考えると爬虫類に思えてきた……」

鳥とか爬虫類の間が龍なのか？　で、進化の途中を見たのが絵を描いたとか……？　よくわからんなあ。

「……しかし、一体どうしてそんなことを聞いてくるんだ？　どうでもよさそうなものだが」

「何を言つてる！　重要な問題だ！」

「うお！？　ど、どうしてだ？」

妙な気迫を持つて、迫つてくる義人。正直怖い。

「ドラゴンの擬人化娘が爬虫類か鳥かじや大違ひだろ！　全くこれだから旦那は……おーい、旦那、どうして蔑んだ目で俺を見る？」

……義人ほど才能と能力の無駄遣いをする奴はそういうんだろうな……。

「当然だが旦那の歌を作つてみた」「作らんでいいし、嫌な予感しかせんから歌わなくてもいい。つてか歌うな」

「聞いてください、『旦那の歌』。……//ヨージックスタートウ・スター・トウつてなんだ。ノリノリか。ノリノリだとそうなるのか。止めても聞かないのは想定内だが、突然バツク//ヨージックが聞こえてきたのには驚いた。振り返るとそこには石井。余計な事を……。」

……しかも曲はサザ サンのテーマかよ……。せめてもひとつ格好いい曲にしてくれ。

「先日旦那の休みに、付けてた～～」

「待て！ いきなり問題発言が飛び出したぞ！？」

なぜナチュラルに後をつけることを歌詞にしてるんだ！？ 音源止めろ、石井！ そう思いつつ石井を見ると、ノリノリで踊つている。駄目だこいつ、早く何とかしないと。

「特売 にんじん 見つけーて ご満悦」

ほつとけ！ 別にいいだろそんなこと！

「キャベツもたまねぎもー ジヤがいもぶたにくもー」

「今日一は肉じゃがかー つぶやく旦那萌えー」

やかましい！ その食材が安くて出来る料理なんて肉じゃがか力レーくらいなもんだ！ サンドウイッチマン（一昨年のM・1覇者）も言つてただろ！

「三井萌えー」

「つるさいぞ石井！ いいだろ別に！ しかもその日の夕飯、実際に肉じゃがだつたんだから余計に！」

く……、とんだ屈辱だ。一体何でこんな恥ずかしい思いをしないといかんのだ。

「大体義人も、どうして俺をつけようなんて考えた！？」

そもそもそれが問題だ。そんなことをする意味がわからない。

「いやー、偶然だよ偶然。おっと」

「……何か落としたぞ。……ってなんだこの写真！？　まさに俺が

にんじん持つてる写真じゃねえか！？」

「なるほどー、確かにご満悦だねー」

「写真撮るのは構わんが、なぜに隠れて、しかもそんなことを撮るんだ？　やっぱ脅迫のためか？」

「イツシージやあるまいし、そんなことに使わんよ。悪用はしないから安心してくれ」

「その言い方は引っかかるなー。まるで僕が脅迫に写真を使つてるみたいじゃない」

その通りだろうが。否定する材料が見当たらん。

「あくまでー、あれは交渉の一環だよー」

……、石井はともかく、いくら考えてもわからん。一体義人がどうしてそんな写真を？

数日後。

「杉田先輩、頼んでたものが撮れたって本当ですか？」

「うむ。これを見るがいい」

「…………。本当に先輩が笑つてる写真だ……」

「旦那は写真に笑つて写らないからな。隠し撮りでもせんと手に入らん。もつとも笑うこと自体少ない氣もするが」

「…………」

「どうした保護者ちゃん。報酬なら別にいいぞ？　今まで通り俺たちを楽しませてくれれば」

「……それも引っかかりますが、複雑です……」

「なんで？」

「……私の魅力って、人参に負けてるんでしょうか……」

「それは違うな」

「どういうことです?」

「特売の人参に負けたんだ」

「……まさか特売の人参に負ける日がこようとは、思いもしませんでした」

「まず競うことがありえんわな」

第三十六話 歌（後書き）

ルーバランさんの小説で、この小説を取り扱ってくれるそうです。
ありがたいことなので宣伝。

「タスキ 雑草達の走り～」、ぜひ～一読を。

「先輩、今度の土曜日お暇ですか？暇ですよね？部活がないのは杉田先輩から聞いてますし、それ以外重要な用事が先輩にあるとは思えません」

「どれだけ失礼な発言か分かっていいてるのか貴様は」

義人め、俺の情報を保護者相手に筒抜けにするとは。個人情報保護の概念が存在しないのか。それに保護者。俺は纖細な性格なんだぞ？その発言がショックで登校拒否になり、ニートにでもなったらどう責任取つてくれる。

「その時は……その……私が養います！」

「ヒモ生活ー？」

「」の年から将来ヒモになる生活を考えてどうするんだ、おい。

「……まあ、それは冗談としてもだ。俺の土曜の予定が部活がなければフリーだと、本当にそう考へているのか？」

「はい」

即答か。即答なのか。……先輩としての威儀が存在しないのか。そういう相手には、少しばかり仕置が必要だな。

「残念ながらその日はデートの約束が……何重くて硬そうなバールのようなものを手に振りかざしてくるんだ！？」

「先輩を殺して、私も先輩の墓を建てます……！」

「それただの殺害予告だ！ も、じゃない！ それに冗談だから！ 別にデートの約束もなければ土曜に予定も入つてない！」

「……本当に？」

「本当だからそのバールのようなものを下ろせ！ 下ろしてくださいお願いします！」

土下座しかねない勢いで頼むと、渋々ながら保護者は凶器を下ろした。……危なかった。思い出が、今まで培つてきたトラウマが走馬灯として目の前を通り過ぎたぞ。涙出てるんじゃないのか、これ？

「先輩、何泣いてるんですか、これくらいのことで。怖かったんですか？」

「……いや、むしろ今までのトラウマを思い出したことで涙が出た自分で言つて情けない。これから死にそうになるたび、あの情景を見ることになるのか、恐ろしい。」

……そもそも、何度も死にそうになることがありえないか。

「で、土曜日だとしたら何なんだ？」

「私たちの文化祭が土曜日なんです」

「それはよかつたな、頑張れ」

「……本気で言つてますか？」

「……いかないと駄目？」

「女性の誘いには応じるのが男性でしょ」

「面倒くさ」

「楽しいですよ」

「それはよかつた。友達と楽しむといい」

「でも、先輩と一緒に樂しこと思つんですね」

「俺は読書を一人でしても楽しめるぞ？」

「……」

「……」

「杉田先輩に頼んでおきます」

「……結局行くことになるのか……」

断つても無駄なんだろうな。断つたら断つたで、一時期の騒音おばさんのように騒ぎ立てられることが日に見えてるし。

「仕方ない。行くことじよ。保護者、お前のクラスは？」

「3・6です」

「シフトは何時頃だ？」

「午前中です……来てくれるんですねー？」

「いや、その時間を避けていく

「……」

「……」

「き・て・く・だ・さ・い・ね?」

「.....はい」

やけにプレッシャーのかけ方がうまくなつたなあ、保護者。あ、
また涙が.....。

第三十七話 予定（後書き）

テスト四時間前なのに小説を書いている自分に、我ながらびっくり。
現実逃避つていいですよね！

第三十八話 抵抗（前書き）

久々の500アクセス突破です。ご愛読ありがとうございます。

第三十八話 抵抗

「土曜日は、文化祭だそうですね」

「それがどうかしましたか、父さん」

「あなたの中学では一般客も来てよいはずですよね」

「仰るとおりですが、何か?」

「なぜ父を誘わないのです」

「思春期の女子は親を他人に見られるのが嫌なものなのです」

「それと情報を与えないのは別問題だと思いますが」

「教えなければ双方嫌な思いをしなくていいでしょ?」

「それは気付かなければこそ、言えることです。現に、無視をされ

た父の心は深く傷ついています」

「無表情で言われても、説得力はありませんよ」

「それは表面上に限つたことです。内心では海よりも深い傷を負いました」

「せいぜい瀬戸内海程度の深さでしきう」

「いえ、マリアナ海溝以上の溝を抱えているのですよ」

「それは可哀想ですね。家でゆっくりと傷を癒してください。家で」「一度言いましたね? 文化祭には来るな、との念押しですか」「その通りです」

「……ということが昨日あったのですよ」

例によつて授業が一段落したころ、健三さんの無駄話（娘の悲哀編）を聞かされていた。思春期なら仕方がないのではないか。俺も姉が文化祭に来て迷惑したので、健三さんの娘さんに賛成だ。……でも保護者は俺を呼んだんだよな。身内でないからいいのか。

「それに続けて、娘は「父さんのような変人に来られると、私だけ

でなく周囲の人々にも迷惑です」とまで言つたです。ひどいですよねえ」

「人ごとみたいに言わんて下さい。俺たちはその周囲の人々に含ま
れているんですから。

「私のどこが変人だというのでしょうか。娘は家の私しか知らな
いからそう言うのでしょうかねえ」

……健三さん。少なくとも、学校でのあなたは変人以外の何物で
もない。そして家でそう思われているのならツーアウトだ。サッカ
ーならカード一枚で退場です。

「まあ、どれだけ抵抗したところで、私が行くのは何人たりとも止
められないのですけどね」

大人げねえ！娘が嫌がってるなら止めてあげてくださいよ！

「本来、文化祭とは日頃の学習成果を発表する場だと思うのです。
地域の文化や歴史……そういうものを親に見せることで、学校で
の学習は充実したものである。そう披露するものが根底になければ
なりません。したがって、私が娘の文化祭に行くのには正当な理由
があると言えるでしょう」

健三さんが正論を言つてる！

「まあ、実際そんなことやられでもしたら行きませんけどね。今回
の目的は暇つぶしが第一ですから。あくまでそれは、私が行くため
の建前です。方便とも言います」

でもやっぱり健三さんだ！——今まで自分中心だといつそ清々し
い！

「第一の目的は娘が嫌がるからなんですけどね」

屈折した愛情！？

「人の嫌がることを進んでしましちう……いい言葉です
悪用しないでください！」

「月日は流れ……保護者の中学での文化祭旦那」「何故にパワプロ風のかね、旦那？」

「なんとなくだよなんとなく。そこは突っ込まんでいい。

「しかし、久しぶりに来たが……やっぱなんもないよなー、ジー」

「そうだな。見渡す限りの田園の中、存在する中学……。田舎丸出しだな」

別にいいだる、田舎でも。たとえ、NHKに郊外の～村と紹介されようと俺はくじけんよ。

「その時歴史が動い……。終わってしまっては勿体無いよな……」

「そんな私的なことはどうでもいいから。旦那、久々の母校に何か

一言」

「風強い」

「母校についての感想じやない！？」

何もないから直接風が当たるのだよ。体育でテニスをしようものなら魔球連発、テニの王子様状態だからな。懐かしい。

「おお、文化祭らしく入口から人だかりが……。人混み行きたくな……。ここまで来たんだし、保護者には来たつてことにして、帰らんか？」

「旦那、消極的にもほどがあるだろ。アクティブにならうぜ」「もともと無理やりに誘われて、だしなあ。やる気もないし、昔の知り合いに会うのも嫌だし。元担任とか会いたくないぞ？『元顧問とかはなあさう。』

「……！？ おい旦那、あの人だかり……何か署名活動しとるみたいだぞ？」

「だつたらなんだつて言つんだよ……。まあ、いいんじやないか？ それだけ、やりたいこととか成し遂げたいことがあるんだろうよ」「署名といえばポケビ、ラビを思い出す……。ウリナリとか、炎

のチャレンジジャーとか、上々とか、内Pとかウンナンの番組は神がかってたのになあ……。終わってしまったのが悔やまれる。なぜ終わつたのか、詳しく知りたければググるといいと思う。

「まあ、俺は大きいものが怖いのでこれ以上は言えないが……」

「旦那、今日は微妙なテンションだな……。署名活動見てこいぜ、内容知りたいし」

「構わんよ」

連れられて見に行つた先、そこで繰り広げられる勧誘の数々。

「署名活動に参加をお願いします」

「二次元の女性との結婚を認めよーー！」

「偏見をなくせーー！」

「俺たちはお遊びでやつてるんじゃない、本気なんだーー！」

……終わりすぎだろ日本の中學。義務教育。つてか俺の母校。

「なんなんだこれは……」

「なんだかんだと聞かれたらり？」

「義人、ややこしくなるからお前はしゃべらんでいい

ただでさえ混乱しどるのに、お前がでしゃばると余計に

「あつ、師匠！」

「義人が元凶かよーー？」

第三十九話 署名（後書き）

テストが終わりました。……さて、何個単位落としたかな……。

来て早々になけなしのやる氣も失われつつある今。俺は一体どうすればいいんだろうか。

「文化祭を楽しめばいいじゃん」

「……一応聞いておくが、やつきの奴らはお前の弟子か？ 弟子なのか義人」

無駄にカリスマ性を發揮したところを見ると、おやじくそういうのだろうなーと考えつつ、尋ねてみる。

「旦那、それは違うぞ」

む？ 返答が意外だ。誇らしげに応じるのかと思ったが。

「それはすまんかったな。さすがにあそこまでの」

「あいつらは同じ一二次元を愛する同士であり仲間。そこに上下関係は存在しないのであり、共に精進するものだからー。」

「…………」

頭痛くなってきた。

義人によれば、あの団体は「一二次元の嫁を愛し、生涯を捧げる」とを誓う漢達の集いくという名称を持つそうだ。因みに、義人が団長を務めていた三年間（一年時から三年連続で就任したのは義人が唯一らしい）の間、この集団は陰で勢力を広げていたらしい。とは言え、表舞台に立つこともなかつたため知られることがなかつた……そうだ。その功績をたたえられ、現在は隠居の身ながら名誉会長となつて相談に乗っているとのこと。果てしなくどうでもいいが、こいつの無駄な才能はどうにかならんのか。正直こいつが指揮をとつたら企業設立、軌道に乗せる といふくらいやつてのけそうだ。

「オタクというのは一般人に疎まれる存在だからな。俺の団長時代はあくまで影の組織として徹底していたのだが……これも時代の変

化かな

「いいのか？」

「何が？」

「いや……その裏舞台の集団がこんなところで署名活動を行つてだよ」

「なに、もう若い者の時代だからな……。俺の出る幕じゃない」「達観した表情で語る義人。遠くを見据えるその眼には、何が写っているのだろうか

「……チエリーが俺の嫁だというのは、譲れんがな……！」

写つっていたのは二次元の映像だつたようだ。馬鹿野郎。そして人選が古い。セイバーマリオネットをわかる読者がいると思つなよ。年代を考える。

「どうした旦那

「なんでもない、気にするな。……といひで、お前はあの署名に参考せんでいいのか？」

「必要ない」

「そうか、お前もなんだかんだで馬鹿馬鹿しいと思つてているんだな高校生と中学生、年齢に差があるからそれも当然か。

「嫁だと思うのは心の中で十分。自分の全てを他人に分かつてもう必要などないのだから」

「……」

いや、格好よく言つても、所詮一次元嫁論争だから。

第四十話 影の軍団（後書き）

ルーバランちゃんからも「うつたネタを使わせていただきました。」
バランちゃん、ありがとうございます。

第四十一話 出し物

当然のことながら、校内は入口以上のにぎわいを見せていた。もちろんうちの高校の文化祭に比べれば、規模も混雑も可愛いものではあるのだが、それでも校舎が小さい分、閉塞感を感じていた。

「……帰りたい」

「こらこら旦那、まだどこも回つてないだろ？が。わざわざ来たんだから少しくらい時間かけても罰は当たらんだろうよ」「みうみう」

「だけどなあ……徒歩十分圏内だし。北高より近いし」

「口答えするな！」

「ええ！？ キレられたポイントがわからねえ！？」

「さあ回る出し物を決めようか」

「……義人、お勧めは？」

「俺のお勧めはこのクラスの出し物、占いの館×ファイト十五発くだ」

「そこ本当に占いの館！？ 意味がわからないよ！ それにファイト十五発！？ 頑張りすぎだろ！？」

「そして、このクラスの出し物、ヒーローショー風小芝居 囚われの姫を救え！ だ」

「……中学の文化祭だもんな。面白そうか、それ？」

「そうそう、旦那が行つたら間違いなく楽しめる内容だよ」

「そうなのか？」

「主に俺が」

「楽しむのお前かよ！？ 俺の反応を見て笑つつもりなんだな！？」

「主演は古木瑠璃さんです」

「……？ はつ、保護者か！」

「旦那、今素で保護者ちゃんの名前忘れてただろ」

「ソ、ソンナコトナイデスヨ？」

「保護者ちゃん泣くぞ？」

「まあ、そんなショーに連れてかれて、反応を逆に楽ししまれる感満載な俺も可哀想だし、泣きたくなるけどな」

「黙つてやるかわりに、一緒に回りつな、な？」

「がつつきすぎだよお前……別に本名忘れてたくらいばれてもいいし」

「じゃあ、言い方変える。一緒に行かないとの学校中に田那が保護者ちやんと付き合つて噂流す」

「脅迫に進化した！」

「くくく……来年北高にきた後輩に質問攻めにあうがいいわ！」

「悪役口調だな、お前じや小芝居に出るべきだ」

「でも行くんだろう？」

「行くけどな」

来て何もせず帰るのも、確かにもつたいたい。俺の反応を楽しむ、とこうくらいだ。きっと驚かれる要素があるのでさう。それなら行つても時間の無駄にはならんだ。

「じゃあ、義人行くぞ！」

「おう、俺たちの戦いはまだ始まつたばかりだ！」

そう、文化祭の出し物を観つづくまで、俺達の物語は続くんだ！
永久に……！

「……！？ なんだこの打ち切り未完、みたいな空気は！？
たかだか見て回る出し物を決めるくらいで大げさだよな」

第四十一話 出し物（後書き）

気付いたら、ええじゃ ないかシリーズ書き始めて一年たつてました。ユニークアクセス累計も十三万を越え、PVアクセスでは七十万越えです。こんな中身のないグダグダ小説ですが、読んで下さる方々には心から感謝しています。本当にありがとうございました。

義人の勧めに従つて、占いの館とやらを体験してみることにした。

「どっちから入る？ 義人から行つとくか？」

「んー、そうだな。その方が都合がいいな」

「何の都合だよ」

その問には答えず、義人は薄暗い闇の中に消えていった。うむ、占いの館というだけのことはある。ムード作りはほぼ完ぺきだな。暗幕が不思議な気分にさせてくれる。

「次の方どうぞー」

「む、はいはい」

考へているうちに順番が回つてきた。まあ、義人の次だつたんだから、すぐ順番が来るのは当然なのだが。

「……我らの館へようこそ。……あなたは何を占つて欲しいのですか……？」

ぐぐもつた声、黒いベールで顔を隠した様子は雰囲気抜群。中学の出し物だと忘れてしまつような手の込みようだ。

……そして、あるいは保護者が占い師にでも扮して、何かしてくるかとも覚悟していたが、そんな様子はなさそうだ。疑心暗鬼にとらわれ過ぎなのだろうか。疑いすぎることはよくないし、少しは反省しておこう。

「そうだな、じゃあ一年後の受験に関して」

「と言いたいところですが、私が占つて欲しいことを言つてましょう……恋愛事について悩んでますね……？」

「いやだから受験について」

「なるほど、高校に入つて初めて体験することが多くあつたようですね」

「受験」

「それでは私がその解決法について占つて差し上げましょう」

駄目だこいつ。人の話を聞いちやいない。

「……まあ、それでいいです」

俺が十六年程度の人生で学んだことの一つは、ムキにならないこと、大人の対応を心掛けることだ。諦めてるだけだろ、とか突っ込んではいけない。

「……ふむ、あなたは複数の女性から告白されて悩んでいるようですね」

「！？」

置いてあつた水晶をのぞき込んだ数秒後、占い師はこいつ言い当てた。……こいつ……できる……！？

「なぜそれを……」

「…………そうですね…………そう、星は何でも知っているのですよ」間があつたような気がしたのは気のせいいか？…………決め台詞か、決め台詞を考えていたのか？

「……一人は幼なじみ、一人は後輩と見ましたが」

占い師こええ！ 個人情報丸わかりなのか！？

「……どうすればいいんでしょうか」

自然と敬語になつてしまふ俺。この子も後輩なのだろうが。

「そうですね……なすがまま、自分の心のままに動くのがいいでしょう」

でもアドバイスは適当だ！

「……ふむ、失礼、少し席をはずします」

何を思ったか、急に占い師が立ちあがつた。

「……例の二人のことを妄想しつつお待ちください」
しねえよ！

数分経つても占い師は戻つてこない。一体客を待たせて何をしているのか……

「…………！」

「ん？」

占い師が出ていった扉から、声が聞こえた。……あれは……怒鳴り声？

「なんだよ……文化祭で穏やかじゃないな……。行つてたしなめてくるか

「おい、文化祭だつてのにもめ事は止め……」
注意をしようと現場に向かうと、遭遇したのは予想外の状況だつた。

まず、真黒な服で身を包んだ女の子。これは先ほどの占い師だろう。いてもおかしくない。

次に、理由は知らないが若干怒り気味の保護者。まあ、こいつはこここの生徒だ。いてもおかしくはない。

最後に、我が親友である義人。きつと、もう占いが終わつて暇になつたのだろう。そう考えれば、ここここに疑問をさしはさむ余地はない。

問題は、保護者が占い師を押し倒すように覆いかぶさつており、義人がそれを止めるでもなくニヤニヤと笑つてていることだ。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

誰も声を発しない。かといって俺も何か言えるほど、状況を整理しきれていない。

「……先輩」

沈黙を破つたのは保護者だつた。少しばかり乱れた制服を直しつつ、俺に話しかけようとする。

「……いや、何も言わなくていい」

情報を整理した結果、導き出される答えは一つ。保護者に言わせるべきことではない。

「あの……これは……」

「空氣読んでなかつたよな……。うん、保護者がそういう趣味を持つていたとしても、俺はできるだけ態度を変えないよう善処する」

「……ひょっとしなくとも誤解してますよね?」

「あのだな、同性愛は日本では市民権を得ているとは言い難いが……」

「頑張つてくれ」

「やつぱり誤解してる!?」

「もういいんだ、何も言つな……」

「違います! そういうんじゃないんです! 私は先輩一筋ですか

ら!」

「……? だがしかし、義人がいるのに止めてないってのは……」

「つむ^旦那。この子らは喧嘩していたわけではないぞ?」

「杉田先輩も煽らないでください!」

「……じゃあ、その占い師の子は……」

「……ルリ、優しくしてね……?」

「義人、こ^二には見てやらないのがマナーだろ?。別の場所行くぞ

「了解、^旦那」

「だから違うんですつてば!」

数分後、興奮してしまった保護者をなだめることに成功した。冷静になつたところで質問を開始する。

「……で、同性愛出ないなら、なぜ押し倒したりしたんだ?」

「それは……」

「私が段取り通りに仕事をしなかつたからですよ

「……そのベル取つてくれる?」

「はい」

「……ああ、健二^二さんの娘さんだつたのか

「はい、いつも父が迷惑をかけております」

「……」

「フォローできねえ。

第四十四話 真相

乱れた服を直し終え、ようやく落ち着きを取り戻した保護者に、こうなった原因を尋ねてみる。百合疑惑が完全に晴れたわけではないのは、ここだけの秘密だ。

「で、どうして二人絡まつてたんだ？」

「絡まつてたとか言わないでください」

「だつて事実じゃん。百合疑惑再浮上。

「そもそも、大声が聞こえたから、俺は出てきたんだが」「来ない方がよかつたみたいだ。あいつらにとつても、俺にとつても。

「…………それはですね…………」

なぜか言いよどむ保護者。心にやましいことでもあるのだろうか

……？

しかしそれに代わって、もう一人の当事者が説明してくれた。「ルリが怒つてた原因は、段取りが違うってことだったんですね」「段取り？」

「ちょっと岬…………むぐ」

話を止めようとした保護者を、義人が黙らせた。……手際がいいな。

「説明を続けてくれ」

「はい。このクラスの出し物を手伝う代わりに、三井先輩が来たら占い師役を変わつてもうつ予定だつたんです」

「保護者に？」

「いえ、このクラスの人から私にです」

別に段取り狂つてないじゃん。

「ルリの言う段取りは、私の占いの内容関係ですよ」

「…………あれか」

思い出されるピンポイントな占いの数々。そりゃこいつらが絡ん

でるなら、分かつて当然だわな。

「三井先輩、どうすればいいか私に聞きましたよね？」

「ああ」

確かに。あの流れで誘導されたら尋ねずにはおれないっていうか。「そうなつたら、私は……後輩の子と付き合ひよいでしょ？…」と言つ手はずだつたんですよ

「むー！ むー！」

真つ赤になつて話を止めようとする保護者。心証を操作しようとしたのかこいつは。

「それを私が違つた答えを言つたので怒つたんですよ」

怒つてたようには見えなかつたが。じやれてたようにしか。

「なんで別の答えを？」

「なぜつて……それはですね」

それは？

「怒つたルリが見られるかと思つたからですね」

「この子Sだ！ 健三さんの娘だから、いろいろ変な点はあると思つてたけど！ 無表情で淡々と述べるとこSとか健三さんこそつくりだ！」

「今悪寒がしたのですが、失礼なことを考えませんでしたか？」

「……そんなことはないと思つ」

親に似ていると思うのは、失礼に当たらない……よな？ 親が健三さんでも。

「……ところで、義人は計画に加担してたんだS？ なぜ保護者を黙らせてるんだ？」

「なぜつて……それはだな」

それは？

「その方が面白くなりそつだからだ！」

「いつトラブルメーカーだ！ 知つてたけど…

「何度かここには来ていましたが……相も変わらず辺境の地ですね、この中学は」

娘の文化祭といつことで、わざわざこの地までやつてきてしまいました。風は強い上に、車での来校は禁止と、来る要素はほとんどないのですが来てしました。これで興ざめするような出し物ばかり見せられた日には、教育委員会に一言いつてやらなければなりません。以前会った教育委員会のお偉方は、祝電で無駄な長話をするくらいしか脳がないようでしたので、効果など期待できるはずもありませんが。

「そこのおじさん、ひからいのクラスで占つてこきませんかー？」

歩いていると、小さなお嬢さんに呼び止められました。女子は発育が早いので高校生と大して変わらないはずですが……それでも小さく感じますね。

「占いですか、それは面白そうですね。少しばかり立ち寄らせていただきますよう」

「いらっしゃいませ！ いやー、さつきいたじたがあつて入客数が減つてたんですよー」

「じたじたを起こす人がいるとは。お祭りとはいえ場をわきまえてほしいものです。

「……では、何を占つて欲しいのですか？」

「そうですね。

「では韓国経済がいつ破綻するのかについて……」

私の予想では、アメリカへの借金返済時期が来る四月くらいのですが。

「……あの、もう少し小さなことでお願いできますか……？」

まあ、これを当てられたら経済評論家が涙目になりますしね。きっとわかつて答えないでしょ。奥ゆかしい。

「それでは金正日がいつし」

「それも駄目です！ 国際関係はやめてください！ できれば政治も！」

ふむ、それでは何を尋ねましようか。

「明日の天気は」

「天気予報を見てください」

「ドーラクエ9は成功するのか」

「批評サイトでも見てください」

「この世に神はいますか」

「いません」

最後は普通に否定されましたね。無神論者なのでしょうか。

「……もう少し占いがいのあることを聞いてくれますか？」

「贅沢な占い師ですね。注文の多い占いの館です。

「……それでは、ですね……」

本命を占つてもらうことがありますか。

占いの館を出た後も、私の満足感が途絶えることはありませんでした。

「私の望むように、あなたの娘さんの望む通りにことは進むでしょう、ですか」

まあ、あれだけ努力をしているのです。神がないのなら実力で結果は決まるのですから当然でしょう そう思しながら歩く健二さんの鞄には、合格祈願のお守りが踊つていていた。

第四十五話 健二ちゃん・おじいちゃんの館（後書き）

健二ちゃんを出してほしことの要望だったのでは、出してもうこましだ。いつもながらの人情ぶりに脱帽です。

第四十六話 別離

保護者と健二さんの娘さんは、これからまだ準備が残つてゐるらしい。そのため、俺と義人に必ず観に来るよう命を押してきた。

「絶対、ぜーつたいて来てくださいね！？」

「はいはい」

「絶対ですよ！？ 杉田先輩、必ず連れてきてください！」

「気合入つてるな。

「そこまで言われたなら行つてやらんこともないが、出し物は何なんだ？」

「それを教えてもらわんことには、どうしようもない。

「それは秘密です」

「何故だ。

「それも秘密です」

「……義人、別の場所回るぞ」

「先輩ー、いいじやないですかー」

「すがるような目つきで俺を誘つ保護者。若干涙目である。

「……仕方ない、行つてやろう」

「弱いなー、旦那」

「つるさい、ほつとけ。

「……先輩、また後で会いましょうね……」

「はいはい」

「いい加減にしてください、ルリ。何回別れのあいさつをすれば気が済むのですか」

「でも、せつかくの機会なのに……」

「クラスの面々に怒られますよ。ただでさえ、いい意味でも悪い意味でもルリは目立つてゐるんですから」

やつぱり立ってるのか。

「……健三さんの娘さんも大変だな」

「それと三井先輩」

「なんだ？」

「岬でいいです。あの親の娘と言われるのは一々気に障ります」

健三さん泣くぞ。

健三さんの娘さん……改め岬ちゃんが、ルリを引きずつて行く。襟の裏をつかんで、文字通り引きずつて行くのは慣れてこるのである。あの子も苦労してるんだろうな……。

「あの一人は、俺たちのような名口ほどみたいだな」

「いやいや、どう考へても岬ちゃんが一方的に苦労してるだろ」

その点では確かに俺たちに近いかもしけんが。

「で、旦那？ これからどうするよ？ 僕は腹が減ったんだが」

「忘れたか義人。この中学は食い物関係の出し物は禁止だろ」「衛生上の関係でいかんらしい。単に教師陣が面倒だからなのでは、と疑つたのは昔の話。

「旦那こそ忘れたか。一つ飯がえる場所があるだろ？」

「そんなんあつたっけか……？」

公立中学であり、九色があるため、学食も購買もない。だから食うものなんて……。

「あ」

「……思い出したか。そう、一つだけあり、しかも無料でえる場所……それが家庭科部の本拠地、調理室だ！」

「せこいな」

「旦那に言われたくない」

この後、義人は調理室で無料配布していたケーキを食い荒らすのだった。全くもって迷惑な客である。

第四十六話 別離（後書き）

mixiにて読んでくださってる方からメッセージもらいました。
尻をたたかれないと書く気になれない自分は駄目人間ですね、わかれます。

番外編 トトロウマバレンタイン

ケース一 初バレンタイン（姉編、三井直樹二歳）

「直樹、いいものあげるからひつひつおいで」

「わー、なになに、お姉ちゃん」

「今日はバレンタインって言つてね、女の子が男の子にチョコをあげる日なんだよ」

「なら、お姉ちゃんは僕にチョコをくれるの？」

「そうだよ。はここれ」

「わーいありがとう。チロ チョコだー。食べていー」

「いいよ。食べなさい」

「いただきまーす……うん、おにしかった。ありがとうございますー」

「食べたね？」

「え？」

「チョコを食べたね？」

「う、うん、お姉ちゃんが食べていいって言つたから……」

「時に直樹、三月十四日はホワイトデーと言つてね、男の子がチョコを貰つた女の子にお返しをする日なんだ」

「そりなんだ。じゃあ、その日にお返しすればいいんだね」

「その通り」

「あー、でも何がいいのかなあ……」

「それなら私の欲しいものでいい？」

「うん、いいよー。でもお金のかかるのは無理だけど……」

「ああ、そんなことはないよ」

「じゃあなんでも言つてー！」

「^絶対服従券^」

「!？」

「だから、私に絶対服従を誓つとこ^う券」

「……効果はいつまでなの？」

一 無論生涯統く」

ケース二 悲劇（タツミ編、三井直樹四歳）

ケース三 平等に（保護者編、三井直樹十一歳）

「おーい旦那、女子がバレンタインのチョコ配つてるぞ」

旦那 何に怯えてるんだ……？ お 保護者せやんも来たそ

セ
先
書
ハ
レ
ン
ト
カ
ル
義
理
の
義
理
の
テ
キ
ス
ト

「アーヴィングの死」

「いいから早く受け取つてください！」

「うわ、でっかいチョコだな……本当に義理なのか怪し痛い！？」

「杉田先輩は黙つててください」

「…………ありがとう、保護者」

………！ 義理ですから！ 懇諒ししないでください！」

「なーなー、俺にはないの？」

「……杉田先輩にもありますよ、はい」

「……なんで俺は五円あるよチヨコ?」

「義理ですからそんなもんでしょう」

「やっぱり旦那だけ特別だろ」

「義人、せつかくくれた保護者に失礼だろ。あらぬ疑いをかけたりしたら。義理じゃなきや本命つてことだら? 保護者が俺を好きなんてありえんよ」

「……」

「……」

「あれ、なんで二人とも黙る? 倭悪い」と言つたか?」

「死ねばいいのに」

「保護者ひでえ!?」

第四十八話 参上

「ふははははは、往け戦闘員ども」

「キハー！」

「」のまま肥沃な土地である牟田を、圧倒的な力を見せつけ我らが手に収めるのだ

「キハー！」

「愚民ども、地にひれ伏し命乞いをするのだ。さすれば命だけは助けてやる！」

「」。中学生にもなつて出し物がヒーローショーといつのは如何なものなのだろうか。

「キエー！……どうか命だけはお許しください……」

キハーキハー言つてたの一般市民かよ！？

「」の哀れなる雄豚に同情心のかけらでもお持ちならば、慈悲と御思いになつて、その寛大なる御心、海よりも広く宇宙ほど無限である度量を發揮して、我らに今しばらくの生存を戴きたく存じます……

……

大げさすぎるよ！……どれだけ立場弱いんだ一般市民！……プライドを持ってよ頼むから！

保護者に懇願されたので、仕方なく来てみた小劇場……もといヒーローショー。誇大広告というか詐欺じゃないかと、小一時間問い合わせたいところだが自重しよ。関わり合いになるところがない。今までの経験からして。

「旦那、面白いなあ」

「マジでそう思うなら検査を勧める」

「なんの？」

「お前が人類かどうか」

「脳検査ですらないのか！？」

「まあ、一割の[冗談はさておき」

「九割本気！？」

「どじが面白いというんだ？」

「いやー、突つ込みどじろ多すぎじゃね？」

「……それは確かに」

「というわけで、突つ込みながら観るのを推奨する」

「それはいいかもな……お、ヒーローっぽいの出てきた」

「待て！ 非道なる甲斐人よ！」

「イントネーションおかしい！ 山梨県人と違うから！」

「出たなムローファイヴ」

「今度は妙に発音いいな……」

「一般人に手を出すとは何たる外道！ 恥じようと思わんのか！」

「はあ……はあ……怪人様……もつと……もつと私に罰をお与えく

ださい……」

「一般人がMだ！ 罰になつてない！ てか一般人と呼んでいいのか！？」

「旦那、特殊性癖の持ち主を否定するのはよくない

「じめんなさい」

「よろしい」

……理解はしがたいけど、個人の好みだもんな。深い干渉は止めよつ……な少年の話を書いたラノベもあることだし。

「みんな！ いくぞ！」

「「「おつー」」

おー、ムローファイヴの面々が集合してきた。

「情熱のレッズ！」

リーダー格だろうか、いい感じだ。

「豊川用水のブルー！」

前置きがレッドと違う！ 統一しろよ！

「価格崩壊を防ぐため、出荷されず食べられもせず肥料となつてしまふ大量生産キャベツの色グリーン！」

長い！ そして生々しい農家の事情を正義の味方の色説明に使うな！

「先輩への愛に生きる乙女…………パンク！」

…………。

「旦那ー、ツツ ハリ放棄は職務怠慢だぞー」

「やがましい」

第四十八話 参上（後書き）

久しぶりに感想が来たので書きました。

気まぐれです。

第四十九話 進路（前書き）

またも投稿間隔が空きました。すいません。

第四十九話 進路

水泳部室にて、男子だらけの座談会中。

杉田「ポロリもあるかも！」

三井「ねえよ！ あつたとしても誰も喜ばねえし！ もし起きたらそれは事件だ！」

一応水泳部室は誰でも入れるので、女子がいつ入ってきてもおかしくないのである。

松田「俺たちももうすぐ文理を決めないといけないからな」

片山「みんなはもう決めてる？」

浜口「いや、まだ俺は決めかねてる」

田村「……将来何になりたいかを考えて決めるのがベストだろ」

石井「浜ちゃんは将来、何になりたいとかあるのー？」

浜口「あるぞ。できれば体育教師になりたい」

片山「信也は昔からそうだもんね。体育教師って文理どっちが有利とかあるのかな？」

杉田「さあ？ でも理系でいいんじゃね？」

三井「根拠はあるのか？」

石井「小倉さんは理系だつて言つてたしねー」

松田「そうだつたのか……意外だ」

浜口「あの筋骨隆々とした体で、細かい計算とかしてたんだな……」

田村「……想像がつかない」

皆の脳裏に浮かぶのは、学生服が筋肉ではち切れんばかりになっている小倉さんが机に向つて延々と計算している姿。イメージにそぐわないことこの上ない。

片山「……まあ、小倉さんのことはいいや。他にみんなの進路が聞きたいいな」

アンケートをとった結果、水泳部内では文系が三人、理系が四人。北高では一年で文理クラスが分かれるため、ここで別コースに分か

れた人は、一緒になることがなくなつた。

杉田「……べ、別にさみしくなんかないんだからね!」

三井「気持ちが悪い。気分が悪くなるから地球から出ていけ」

杉田「退去宣告! ? 範囲でかすぎだよ!」

浜口「まあコントはそのくらいにしておいて。イッサーは将来何になりたいとかあるのか?」

石井「僕は飛行機とか作りたいなー」

松田「イッサーは見るからに理系だしな……飛行機か、いいんじゃないか?」

石井「ゆくゆくは自分で作った飛行機の側面にー、> > > > かがみんとか描いて飛ばしたいなー」

三井「一瞬でもお前を見なおした自分をぶん殴つてやりたい。鈍器で」

所詮石井だつた。

松田「そつ言うみつちやんは将来の夢あるのか?」

三井「あるぞ」

浜口「教えてみ、ん?」

三井「聞きたいか? イメージと違うかもしけんぞ?」

片山「そうなの? 聞きたい聞きたい」

杉田「……」

石井「ではではー、三井の将来の夢はー?」

三井「それは……公務員だ!」

全員「……」

三井「……あ、あれ? 意外すぎたか?」

浜口「イメージ通りすぎるな」

田村「……よく言つて堅実」

松田「夢がない」

三井「……何故、将来の夢を語つただけでフルボッコにされなきやならんのだ……」

第四十九話 進路（後書き）

ちょっとした言い訳。大学の新歓用四コマとか、たまつてた物の消化とかで忙しかったんです。漫画見たけりや立命にまで来てください。無料配布します。

第五十話 話

「保護者、話がある。今から言つところに、一人で来てくれないか」「……え？ 先輩それってどういづ……」

「頼んだぞ」

「あ……は、はい！」

「とまあ、こんな会話で呼び出されたのにもかかわらずですね」「ああ」

「どうして！ 私は吉野家にいて！ しかも先輩以外にもう一人いるんですか！！」

「そう怒鳴りたてるな、他にもお客さんはいるんだから。いくら入客が少ない時間帯とはいえ、貸し切つてるわけじゃないんだぞ？」「ふーつ、ふーつ」

「猫かお前は……大体においてだ、相談は清水から持ちかけられたからだし」

「それならそうと電話の時に言つてください！ てつきり……」

「てつきり何なんだ？」

「うるさいです先輩！ それで用件はなんですか？」

「それは俺から説明しよう」

「くだらない用件でしたらその人に襲われたと大声で叫びつつ北高周辺を練り歩きます」

「うわー、清水の人生、かなりの危機的状況にあるんじゃないかな？」

「人ゴとか！ 人選間違えてるぞ三井！ この娘危険だ！」

「いやー、だがこんなこと頼める女子他に見当たらんしな」「…………」

「保護者くらいなんだ、理由も聞かず付き合つてくれるのは……。

「保護者くらいなんだ、理由も聞かず付き合つてくれるのは……。感謝してる。ありがとうな」

「…………」

「本当に嫌なら俺なんかの相談断つてもいい。もちろんそれで恨んだりもしない……。ただ、できるなら手伝つてほしいというのも事実だ。……駄目かな？」

「……先輩……。いえ、私先輩のためなら別に構わないです……」「おい、話続けていいか？」

「……空気読んでください、名古屋清水口の美宝堂さん」「また東海地区限定でしかわからないネタを……」

美宝堂とは、「名古屋清水口の美宝堂へどうぞ！」のフレーズでおなじみの、眼鏡をかけた三世帯家族が出てくる老舗のCMである。東海の人間はこのCMに出てくる子供（現在はいい大人）と共に成長してきたと言つても過言ではない……。まあそれはそれとして、なぜに保護者は急に不機嫌に戻つたんだ？ そこそこ機嫌がよくなつたように思えたのに……？ 保護者が読めといつた空気が俺も読めていないな。黙つておこう、馬鹿にされるのも嫌だし。

「俺は彼女が欲しいんだ！ そのための指南をお願いしたい！」

「彼女が欲しいなら性格矯正プログラムでも受けて、品行方正公明正大場の空気を読める性格を少しなりとも獲得してから出直してください」

「……保護者、清水はこれでも纖細だから。あんまり言いすぎると泣きだすぞ。こんな場所でも」

だつて早くも涙目だし。吉野家で泣きだされたら俺には如何ともしがたい。今でも結構店員の目が厳しいのに。

第五十一話 会話（前書き）

また間隔空きましたね。吉野家のセールが悪いんです。店長が七連勤とか入れるから……。
以上聞き苦しい言い訳でした。本編どうぞ。

「店員さん、頭の特盛りとけんちん汁、ポテトサラダの胡麻ドレッシングで頼むよ」

「ねえねえ、頭の特盛りってなあに?」

「頭の特盛りとは」飯は並みの量、牛肉は特盛りの量とこつめーユーのことを

「くえ、清水君って物知りなんだね、素敵!」

「お待たせしました、こちら御注文の品になります。」ゆっくりと

「ああ待って」

「は?」

「先に会計を頼むよ

「どうして先に?」

「帰りに混んでたら時間がかかるだらう。先に払っておいてこいつでも帰れるようにしたいのさ」

「後あとのことまで考えてるなんて素敵ね!」

「……ってな感じにデータは進展すると思つたが、吉野家データ以上清水の妄想でした。

「保護者、こいつの妄想が少しでも予想通りに行くと思つか?」

「ありえませんね

「……だよな」

男の俺（彼女経験無し）の考えだし、もしかしたら女とは考え方が違うのかなーなどとこつししばかりの同情心は無駄だったらしい。

当然か。

「なぜに！？ これだけ知識をアピールしたところにビリして？」

「先輩、事実を述べてもいいですか？」

「なぜ俺に確認を求める」

「……本気で言つたら、先輩に引かれるかもしれないじゃないですか」

「構わん、俺は気にしない。大体お前の毒舌は承知の上だし、清水は多少痛い目にあつた方がいい」

「それなら言わせてもらいます。そこの人には反省しつつ聞いてください」

「わかった！ いくらでも聞くぜ！」

何そのナイスガイっぽい返事。叱られるのに。

それでは……と前置きしつつ、保護者は言葉を発した。

「まず吉野家に彼女を連れてくる発想が意味不明です。安い速い旨いが信条の店に気になる人を連れてくるつて親睦を深める気あるんですか？ それに吉野家に詳しいって常連ですか。日頃の食生活がいかに荒れてるかアピールしてるんですね、馬鹿みたいで。その上値段一緒にお米の量だけ少ないメニュー頼んで勿体ない。お腹がすいてないなら並でも頼めばいいでしょう、肉ばっかり食べたいなんてどれだけ肉に飢えてるんですか。筋肉かもしれないんですけどあなたの肉は常人以上なんですから自重してください。最後に会計を先にやるのは食い逃げに間違われる原因になるじゃないですか。デートでそんなことになつたら馬鹿ですよ。知的とはあなたからもつともかけ離れた言葉です。異常ですが、総じて言うならこれは最悪です。センスないです。彼女が欲しいなら私のいない、一般人に迷惑がかかるないあなたの頭の中でいくらでも声かけてください。誰か理想的な女性が引つかかるんじゃないですか？ 心底興味ないんでどうでもいいんですけど」

「うわああああああん」

あ、清水が泣いて去っていった。頑張れ清水、いいことあるや。

来世かもしれんけど。

「……どうでもいいけど会計は俺持ちか？」

「先に会計してませんでしたよね、あんなこと言つてましたけど」

……まあ、毒舌浴びせられたのは間接的に俺のせいだし、ソレは

払つておこう。

「しかしあま……よく言つたもんだな。気に食わんことでもあつたのか？」

「……先輩がそれを言いますか？」

確かに、用件も言わずに呼び出したりしたの俺だしな、申し訳な

い。……そうだ。

「保護者、これから暇か？」

「暇じやないならわざわざ来ませんよ」

それはよかつた、なら……。

「今から映画にでも行こう」

「……え？」

「おひるね？ 見る映画も決めていいし……迷惑掛けたしな

「え、ちょ、な、あの、いいんですか！？」

「俺が怒らせたみたいだしな……、嫌か？」

「嫌じやないです！ 大歓迎です！ 災い転じて福となるです！」

「よーし、じゃあ今から行くか」

「行きましょう！ 今恋愛映画やつてましたよね！？ 一人つきりで観賞しましょう！」

うんうん、機嫌を直してくれたみたいでよかつた、それならもつと奮発して

「そんなに喜んでくれるなら、みんなも呼ぶか。義人とか石井とかタツミとかぶほあつ！？」

みぞおち入つた！ みんなで楽しめよつと思つたのに何故！？
「……余計なことはしないで、一人つきりで行きましょうね、せ・ん・ぱ・い？」

「……行きましょつ
こわいです保護者さん。いやまあじで。

第五十一話 決闘

田村「……遂に決着をつけたときが来たようだな……」

三井「悪いがお前に勝利を譲るつもりはない、おとなしく……逝つてもらおうか」

田村「……笑止」

三井「上等だ……その減らず口、一度と叩けなくしてくれる!」

松田「二人の背中がゆらいで見える……」

杉田「まさかあれは……鬪氣!?」

浜口「この時代に鬪氣を扱えるものが残つていたとは……」

片山「知つているのか信也!」

浜口「鬪氣とは……む、動くぞ」

何がきつかけとなつたのか。風の音。空氣の流れ。あるいはきつかけなどなかつたのかもしない。本能の赴くまま、全身全靈をただ一つの事……相手を消すことに集中した結果見えたのかもしない。三井にとつて有利な状況……今攻撃できるのは自分だけであるという事実が動かしたことも否定できず、逆に田村が誘つたとも言えなくはない。どちらの判断が正しいのか……それは戦いの後、同じフィールドに立ち続けていられたものが決めることである。今すべきことは一つ。全力を持つて叩き潰す。それが礼義でありこの戦いの根源なのだ。

150

田村「うおおおおおおおおおお……」

三井「ああああああああああああ……」

石井「終焉の時か

「

辰美「何してるので?」

全員「「「ドッジボール」「」」

辰美「.....」

三井「いやー、いい汗かいだな。運動はいいものだわ」

タツミ登場でいい熱闘感こそ削がれたものの、ドッジは俺のチーム勝利で無事終了。全く、県で表彰を狙う選手が情けない。本職は水泳でドッジと全く関連性がないけど。

辰美「.....闘氣とか何なの？」

なぜ冷めた口調なのだろう。あの頂上決戦、みたいな空気がいいと、いうのに。やはり女子供に男のロマンはわからないものなのだろうか。性別の違いとは斯くも大きな問題なのだ。嘆かわしい事象である。きっと本当の意味で男女がわかり合つことはないのだろう。残念。

杉田「それっぽい雰囲気が出ていいじゃん。内野に残った一人の一人騎打ちだつたわけだし」

松田「みんなノリノリだつたなー、序盤でやられた主人公のライバル臭がプンプンしてたぜ」

片山「それにしても強いね、二人とも」

浜口「特にみつちゃんはなあ、運動神経ではこの中じゃ低いほうなのに」

杉田「ふふふ、旦那は小学校の時学年でも五指に入るドッジボール

「だつたのだよ」

三井「なんだそれ」

杉田「中でも旦那のディフェンス技術は素晴らしいものがあるな」

石井「攻撃面ではアンダースローからの変則球が厄介だしねー」

松田「まあ、三井のまた無駄な面が見れたからよしとしよう」

三井「.....どうせ俺の特技は無駄で役に立たんよ」

なぜ勝ったのに落ち込む羽田に陥ってるんだ、自分は。

第五十一話 決闘（後書き）

馬鹿馬鹿しくて何が悪いんですか！（逆ギレ）

第五十二話 ブログ

おの「もすなるとブログいうものを、われもしてみんとてするなり。ルリに誘われて初めてみたブログですが、今では私に相談しに来る常連ができるほどに興隆しています。ブログのタイトルはみさきち相談室（ルリが名付けたものです）。今宵も悩める子羊たちが、救いを求めてやって来ています。

FROM ラグビー部次期エース

おっす、みさきち！ 僕、女の子にもてたいんだ！ 頭も悪くないし運動神経抜群、女の子には優しくしている僕がもてないのはおかしいと思つんだ！ どうすればもてるようになる？ 教えてみさきち！

ANSWER みさきち

この文章一つをとっても、あなたの傲岸不遜、自意識過剰な態度がにじみ出ています。根本的な性格矯正をお薦めします。小学一年生からやり直してください。

FROM 学年唯一の常識人

最近、同級生から「優柔不断」「甲斐性なし」などといわれのない中傷を浴びせられる日々が続いています。以前はそうでもなかつたのですが……。どうすればいいと思いますか？

ANSWER みさきち

原因がわからないと対処のしようがありません。きっかけは何か
思い当たりませんか？

FROM 学年唯一の常識人

そういうえば、同時に一人の女子から告白をされた後、言われるようになつたような……。告白の返事はまだしてないのですが、こんなささいなことが原因ではないですか？

FROM ラグビー部次期エース

<<学年唯一の常識人

消えてなくなればいいのに消えてなくなればいいのに消えてなくなればいいのに消えてなくなればいいのに消えてなくなればいいのに消えてなくなればいいのに消えてなくなればいいのに消えてなくなればいいのに消えてな

ANSWER みさきち

<<学年唯一の常識人

日本語は正しく使つてください。いわれがあります。原因は間違
いなくそれです。これからも「優柔不断」で「甲斐性なし」と呼ば
れ続けてください。優柔不断で甲斐性なしな常識人かどうかも怪し
い人。

<<ラグビー部次期エース

気持ちはわからないでもないですが、荒らさないでください。あ
と、強く生きてください。

FROM ケンゾー

娘が冷たいんですが、どうにかなりませんか？

ANSWER みさきち

物事には原因があるものです。嫌われるようなことをしたのでしょうか。後悔しつつ態度を改めてください。ちなみに娘のブログに書き込む父親は最低だと思われます。おそらくそのようなことをしたなら、より一層、親子間での交流はなくなるでしょう。世の中の親がすべて常識を持ちますように。

第五十三話 プロlogue（後書き）

漫研四人で十時間耐久カラオケにいきました。すべてアニメ、ゲーム関連で歌いきったのに、帰つてみると歌えばよかつたと後悔する曲が残つてゐる不思議。

「子供のころつて戦隊ヒーローにあこがれるよな、旦那！」

「俺はウル ラセブンとかタロウとかの方が好きだったから、じゃ」「今面倒だと思って無理やり話を打ち切つただろ！？」

だつて義人から俺を巻き込もうとするオーラが出まくつてゐるから。これは乗らない手しかないだろ？

「中学の文化祭でも保護者ちやん達がやつてたじやん！ ブームなんだよブーム！ 時代の流れに取り残されてもいいのか！」

「むしろ逆行してゐるだろ？ が。お前の精神年齢は小学生並みだとは思つていたが、保育園児並みだつたとは驚きだ」

「男とは時に子供のような熱意を持つことがある馬鹿な生き物なんだよ」

「達観したセリフは、一度でも年相応な行動を取つてから言つんだな」

「ねーねー旦那、御託はいいから戦隊ヒーローにやるつぜー」
やつぱ巻き込む氣だつたんじやねえか。……否定してなかつたし

当然と言えば当然か。

「だから断ると……」

「旦那だつてオーレ ジャーとかカクレンジャ とか好きだつただら？」

「誰がさとう珠 やケイン スギが出てた戦隊物を好きだつたと？」「よく知つてるじゃないか」

ちつ、ガキの頃の話じや仕方なかつ。好きなものは好きだつたんだ。

「じゃー俺が冷静沈着で聰明なブラックだな」

「分不相応にもほどがあるだろ」

ケイ コスギに謝れ。

「さあ旦那は不良少年の役をやるんだ」

「敵は魔物とか世界征服をたくらむ悪役ですりなーのかよ……」

「へつへつへ、学校をさぼつてのー服は最高だぜ」

「待てーい！」

「な、何だてめえはー!?

「ありとあらゆるもののが黒！ キタブラック！」

「一体何の用だ！?」

「未成年の分際でタバコなんか吸うんじやないー！」

「俺の勝手だろうが

「手遅れになる前に止めるんだ、後悔することになるやうに」

「?」

「肺もブラック、キタブラック！」

「いやヒーローとして駄目だろそれは。
まあ貴様のことなんてどうでもいいんだけどね、仕事でやつてる

だけだから

「最低だこいつ！」

「腹もブラック、キタブラック！
いちいち鑑^{かん}陶^{とう}しいなおい。

「（スツ）」

「なんだそれは？」

「PSPだ」

「それがどうした？」

「PSPのカラーもブラック、キタブラック！」

「何の関係もねえ！ てか趣味の段階じゃねえかそれ！」

「……冷静沈着はどこへ消えた」

「うきすたで好きなのは黒井な
「もういいから
「こ先生、キタブラック！」

とある休日、忙しさで枯渇しがちな読書欲を満たすために図書館へとやつてきた。俺の身の周りは「読書? 毎日読んでるよ、漫画で」(山田氏)や「文章? 読んでるよ、ビジュアルノベルゲー絵付きのゲームで。一般的にはギャルゲーとか言われたりもするけど」(三井氏)などという間違った人間ばかりのため、縁遠くなりがちなのである。そのため、そいつらが来ることなどないであろう安息の地で、たまの読書日を作るのが心の平穏につながる。ビバ読書。知り合いのいない状況でゆつたりと時間を過ごす……なんと安堵できる瞬間であろうつか。

「見たことのある顔だと思えば、三井先輩ではないですか」「!?

「瞬身構える俺。といつも安息の地にも魔の手が来てしまったのか!?

「お久しぶりです、いつもルリと、不本意ながら父がお世話になつております」

「……なんだ健三さんの娘さんか」

「なんだとは失礼ですね。それに父の娘、といつも一方はいい加減やめていただけませんか?」

これは失敬。

「でもなんて呼べばいいんだ? 名字……山本さんか?」

「できれば父を連想するのでやめてほしいです」

健三さん泣くぞ。

「それなら下の名前か。保護者が呼んでたよな、えーと?」

「岬です」

「岬さんでいいのか?」

「結構です」

それはよかつた。しかし女子を下の名前で呼ぶのは恥ずかしい

な、
うん。

「……ところで、三井先輩は何をしたいの？」「

「そら読書だろ」

「…………… そうですね、愚問でした」

まあ、勉強しに来る人も中にはいるけどな。俺から見たら本だけという誘惑の中よく集中できるなと思うわけだ。

「しかし……岬さんは何を読んでるんだ？」

「一」れですか？　へ破戒へです。やはつじつこつた小説は考えさせ

「元」

「時代を感じさせられる場面もありますが、人の機微についても読

み手に推察させる点がいいですね」

意気揚揚と語る岬さん。なかなかのものだとは思うが、
にある意味残酷な事実を突きつけなければならなかつた。
俺は彼女

——言ひしか?

「建川美術館の開館式典、開催されま

」
…
！
？

あ、困った

まあ氣にするに足ないと思ふが、物はあれば、同じ家で暮らしてゐるから、其様が以てその物が何物か、

「そ、そんな……」

絶句とはこの様子を言うんです、と教科書に載せたいくらいだな。

「客觀的
六景

「で……訂正して貰いたい。」

- 10 -

いつも冷静な印象があつた岬さんだが、逆鱗に触れたようだ。逆鱗が健三さんに似ている、という点であることが不憫でならない。

ちよ、落ち着いて、こゝ図書館！」

「三井先輩が訂正してください。たら今すぐこでも…」

頬を紅潮させて俺に迫る岬さん。ち、近い。

「ですから私と父では何もかもが違うんです… 同じなのは苗字と血液型くらいなんです！」

血液型も同じなのか。ああ、この子も感情を表にして怒ることもあるのかー、近くで見ると可愛い顔してるんだなー、眼鏡外せばいいのにー、などと気押されながらも現実逃避気味なことを考えていると。

「……何してるんですか、先輩、岬……？」

般若の顔をした保護者が立っていた。

話を聞くと、もともと一人で来ていたらしく、俺が岬さんに見つかったときは偶然「お花を摘みに」行っていたそうな。戻ってくると俺、岬さんが顔を突き合させていたから切れかけた、とそう言つわけらしい。

「先輩、岬とキスしようとしていたとか、そういうわけではないんですね？」

「ない」

「そうです。少し熱くなつてしまつてつ…」

保護者の声を聞き、冷静になつた岬さんは驚くべき反応速度で俺から離れた。今も若干距離を置かれていることからしても、怒らせてしまつたようだ。

「先輩、からかつたらいけませんよ？ 何か岬に一言あつてもいいんじやないですか？」

じと目で俺を見る保護者。こちらはまだ疑つているのだろう。少しは信用しない。

「そうさな…」

そう言わると何かしたくなるのが人間といつもの。

「岬さん、近くで見ると可愛いね

「な

「可愛いんだから、眼鏡外したらいいの?」

「……はう……」

「機械的に無表情を作るんじゃなくてさ、わざとくまなく感情を表に出して……つてうう!?」

「せ・ん・ぱあ・い? なに口説いてるんですかあ?」

「笑顔が怖いよ。戦車が裸足で逃げ出すくらい怖いよ。

「じゃ、じゃあな一人とも、また今度!」

「三十八計逃げるが勝ち。これは敗北ではない、戦略的撤退なのだ。

「あ……。ちつ、先輩を逃しました」

「……」

「岬?」

「ルリ」

「ビウしたの?」

「……私、男性にあんなこと言われたの、初めてです……」

「……」

後日譚。

「……娘が別居したいと言つ出したんですが、ビウしたらいいんで
ショウカネ」

「……あれ? もしかして俺が原因?」

第五十五話 謙二娘（後書き）

十一時間耐久カラオケ（アニソンしばり）誕生パーティーは死ねますね。しかも途中なぜか巫女服に着替えさせられたりするオプション付き。誰かあの写真を消去してください。

第五十六話 疑惑（前書き）

エロゲ規制とか日本政府はどうなつとるんですか。趣味を批判するとか意味がわからんのですよ。それより先にパチンコとか酒とかタバコとかを規制しようと（ry

第五十六話 疑惑

教室で一人、ゆるりと過ぐすのもよいものだ。いつもは喧騒の中にいることが多いが、こうして周りの級友が各自グループを形成して笑顔を見せる姿などを観察すると、平和を実感する。たまにはこうして何もない一日を過ごすのも

「あおくん、ロリコンって本当なの！？」

……どうせ何か起るとは思っていたよ、今までの経験からして。

「答えてあおくん！ 高校一年でロリコンってことなら趣味は小学生！？」

「とりあえず大声をあげるのはやめてくれ、注目を浴びる」

そんな大声出されたら、ああやつぱり監視して見てるし。ロリコン連呼するな、ロリコンの疑惑がクラスで広がること確定じゃないかこの野郎。……女の子だから野郎ではないか。

「まさかそれ以下の年齢層！？ ダメだよなあおくん、ロリコンは犯罪だよ、矯正しないといけないんだよ！？」

「お願いですから黙つてください俺が変人だと思われるじゃないですか勘弁して下さい」

……ああ、俺の築いてきたイメージが音をたてて崩れているような……。

「安心しろ旦那、今このクラスで旦那を常識人だと思っている人は皆無だ」

「貴様が原因か義人！？」

「来るや否や濡れ衣だと！？ おれの信頼度はそこまで低いのか！？」

？

「信用してるぞ、間違いなくお前が元凶なのだ」のトラブルメイカーが

「そんな信用いらない！」

「しかも俺が変人だと！？ 誰がそんなことを言つてやがるー。」

「クラスの総意だ」

ペラ、と出されたのはアンケート用紙。……なるほど、これはクラス全員がおかしいからこいつの結果なんだな。間違つてているのは俺じゃない、世間だ。

「そつだよなおくん、性癖を明らかにされて動搖してるのはわかるけど落ち着いて！」

「俺のタツミに対する信用度も、着々と減少中だ」

「どうしてー？」

「答えは簡単、口の「ンじやないからだ」

「というかなぜタツミにこれまで疑われてるんだ？」

「でも噂になつてゐるし……」

「誰から聞いた？」

「清水君」

よし、紳士的な報復に出よう。

「うわああああああああーーー！」

「どうしたの清水ー？ 周囲を引かせるほど号泣してー」

「こ……これを見てくれ」

「んー、アンケートー？」 彼氏にしたくない人ランキングー？

清水がダントツ一位なだけじゃんー。これがどうかしたのー？ 「今まさにお前が答えた内容が原因だよー。」

「こんなの単なる事実じやないー」

「ちくしょおおおおおおーーーー！」

「……思い知つたか清水」

「三井！ なぜこんなに（俺ことひ）惨いことを……」

「自分の胸に聞け」

第五十七話 真実

「さあ、吐け！ 貴様が元凶であることはすでに聞き取り取り調査済みだ、清水！」

「だ、だが待つてくれ刑事さん… 僕は決して根も葉もない憶測を言つたわけでは……」

「……ふう、こんなところで素直に罪を認めないお前を見たら、お袋さんはどう言つだらうな……」

「な……！ お袋は関係ねえだろ…」

「ふふふ……お前がこのまま否認を続けるよつなり、家に報告せざるを得んな。…子が嘘をついていると知つた家族の悲哀……。俺も見るには堪えんが是非もあるま…」

「お袋……俺はお袋に嘘なんか吐きたくはないんだ！ 中学時代…いや今だつて苦労をかけてるのにこれ以上は！」

「ならわかるだろ？ ……？ 君のなすべき行動が…」

「くつ卑劣な…」

「さあ吐け！ 」の私をロリコン呼ばわりしたその理由を…」

「り…理由は三井がもてるのが羨ましくて悔しかつたから…」

「俺のどこがもてるつて？ はは、冗談はよしてふぐつ

「……なおくんのバカ」

「お、俺がいつたい何を言つたと…」

「知らないつ！」

「……ど畜生があ！ いつとひむそばから何リブメしてるんだよクソッたれ！」

「清水ー、」は泣いてもいと思ひよー

「うつ、うつ」

「なんか俺が悪いみたいな流れに……」

「反論はできんな、旦那」

「……まあいいが、結局それで根も葉もない噂をばら撒いたのか？」

「うつうつ……根も葉もないわけじゃない……」「なんだと！？」

「杉田が……三井は口リコンだつて言つてた」「やはり貴様か義人！……」

「待て待て、俺はそんなこと言つてないぞ？」

「そんなことはない！ 確かに「旦那は小さい子が好きだ」と

「義人、返答の次第によつては今後不自由な生活を余儀なくされるが異論はないな？」

「ありまくつだよ！ てか清水俺のその発言はあれだ、「旦那は小さい仔が好きだ」つてことだ！」

「同じじやねーか」

「子と仔の違いだ！ 旦那がそこの林から出てきたイタチ抱いて頬を緩ませてたから！」

「……」

「紛らわしい発言するんじやねえよ！……」

「……わ、私は初めからなおくんを信じてたけどね？」「嘘だつ！……」

数日後。

「旦那ー、また旦那が口リコンつていう噂が広まつてるぞ」

「この前の発言が後を引いてるのか……厄介な」

「いやいや、それとは別に……」

「三井が図書館で中学生口説いてたつて噂がー」

「……オボエテナイヨ、タダノウワサジヤアリマセンカ」

「動搖しそぎだろ」

「わかりやすいねー」

「...ふん」

だ

第五十七話 真実（後書き）

地の文が面倒くさかつた……なんてことはアリマセンヨ？

第五十八話 ジャンプ漫画

今日も今日とて同じメンバーでの雑談。まったくもつて暇な連中である。進歩はないのか、飽きはしないのか、まったくもつて理解不能である。

「何ブツブツ言つてんだ、旦那？」

「……いや、単なる旦那嫌悪だ、気にしないでくれ」

「ジャンプ漫画で一番燃えるのはドリコンボールだよな！ 格が違う」

「ミーバスやつてた僕からすると、スマッシュは外せないよねー」

「ふん、まだまだだな二人とも。歴史に残る燃え漫画の傑作を忘れるとは。それでも一介のオタクと言えるのか？」

「自称オタクではない旦那がそこまで言うとは……。いいでワンピースとかブリーチとか言つたら、少し旦那を見る目が変わるぞ？」

「具体的にはどんな風に？」

「オタクであることを否定しているものの、実はかなりこっち側の人間くからこっち側の人間なのに一般人ぶる常識人（笑）まがいの人間くへとシフトエンジする」

「現在の評価も十分悲惨じゃねえか！」

「おやおやー、そんなにむきになっちゃつてー」

「これ以上反論しようにも、すればするだけ俺の印象が悪い方向に行くことになる。かといって何もしなければ、ただひたすらに変なイメージが残つてしまつ。なんて巧妙かつ悪辣な手口なんだ……。幽々白書に出てくる閻魔大王（ローランマの父親、ごつい）でもここまで非道はしまい……！」

「旦那、無理にジャンプネタに走らんでもよからう」

「そつだな。俺もちよつと無理があると思つた」

お前の発言を否定したいのは本氣だが。……いやマジで。

「それでー、三井が勧める燃え漫画の傑作はー？」

「T O 1 0 V e r ? いちご100%? E - S ?」

「なぜ青少年がもし好きでも「べ、別にこんなのに興味ねーよ」と思わずツンデlenaセリフを吐いてしまう漫画を選んでしまった

「ボーボボー? ミスフルー?」

「ギャグ漫画じゃねえか」

「旦那の中ではミスフルはギャグ漫画なのか……」

正直野球シーンはいらないと思うんだ。ギャグマンガなのに熱くなる筆頭は世纪末リーダー伝たけしだが、その対局はミスフルと書いていいだろ。野球漫画? ルーキーズでいいんじゃね?

「他何かあつたつけー? 黒ネコさんとかー?」

「ガンアクション漫画を宅急便みたく呼ぶな

「ブリーーチとかナルトか?」

「もう完結した漫画だ」

「ターチャンとかマキバオーとか

「それもあつたな、だが俺の中ではそれ以上に燃える作品だ」

「筋肉マンー?」

「チヂミマンとかいるんだぜ? 名前のノリがラッキーマンと同じレベルだろ」

これは大場つぐ……ガモウひろしが真似したといつべきか。

「サラブレッドと呼ばないで?」

「覚えてる人いるのか」

確かに良作だつたけれども。

「てかお前らほんとに忘れてんのか!? 傑作があるだろ? ハダイの大冒険くという傑作が!」

ポップの成長つぱりとか格好良さとか、あれは言葉じゃ語りつくせんほどだろ!

「これだからお前らは、萌えに走つて本質を忘れてるんじゃないの

か？少年漫画、ゲーム原作の漫画の最高峰だらう……」
「これは二人とも説教コースだな。みつちりとシグマの男前つぱり
について指導せんと……。」

「てか旦那

「どうした？」

「今まさに旦那がオタクっぽい」

「……」

……なんてこつたい。

第五十八話 ジャンプ漫画（後書き）

今月は飲み会で後輩を奢らないといけない（8000円）のに、北方謙三の楊令伝を大人買い（八巻、5000円）してしまうという。衝動買いつて怖いですね！ 来月はパワポタも買わないといけないのに……。

目が覚めるとそこは、見知らぬ部屋でした。

「……落ち着け、俺」

「こういう場合、自分を見失つたら負けだ。冷静に状況判断をする
ことこそ大事。慌てても事態は好転しない。どういうわけか今ここ
にいる理由、昨日何があつたのかが思い出せない。」

当然俺のものではない。布団の色は薄い桃色、シーツは白で若干いい香りがする。

次に部屋全体を見てみる。派手なものは見当たらず、田についたのはねいぐるみや背表紙がピンク色な漫画。……要するに少女漫画である。ここから女性の部屋であると推測される。

少女漫画などない。あるいは餓狼伝などの格闘漫画だ。

ふむふむ よー、やく頭が洗えてきたぞ……」「
とりあえず言えることがある。というか叫びたい。

「なぜここにいるんだ？」
「ああ、それはいんたつー？」

俺全然冷静でないな。（逆境×）

冷静を取り戻す前に足音が聞こえてきた。鬼が出るか蛇が出るか……。

「おはようタツミ、……大丈夫とは？」

「それは、昨日の……あの、ち、気にしなくていいからね？」
「何が！？」

「私はその、別に嫌じゃなかつたし……」「だから何が！？」

「なおくんなら寝ても……ううん、なおくん以外には許さなかつたと思つ」「ううん」と思つた

「ちょ待て！ 昨日いつたい何があつた！？」

「寝る！？」

「それじゃ、朝（）はん出来てるから、それだけ！」「言いたいことだけ言つて消えるな！ 説明を、説明をしてくれ！」

「誰か、俺に真実を！ 真実をくれ！」

「あらあら、朝から元気ねえ？」

「望さん！？」

救世主あらわる！ 望さんはタツミの姉にして俺の姉ちゃんの

親友、俺の知り合いには珍しい割と常識をもつた人である！

「お久しぶりです、どうして俺はここに！？ ここはタツミの家…

…てか望さんの家ですか！？

「そうよー？ でもお久しぶり、でもないのよ？ 昨夜会つてるんだから」「…どうじつです？」

「まあ、それはさておき、直くん？」

「はい？」

「タツミのベッドの寝心地はいかがだったかしら？」

満面の笑みを浮かべ、俺に訪ねてくる望さんは小悪魔にしか見えなかつた。

「……ノーノメントでお願いします」

「この人は、俺の幼少時代、姉と一人で俺をおもちゃにしていたのである。……だから、いい香りがする、と思ったなどと言えば、からかわれることは疑いようがない。」

「そう？ 直くんを寝かせると決めてから、辰美が慌てて部屋を片付けてたのよ？」「

それを聞いて俺にびびりしんど。

「のぞいて見たら、「なおくんがここに寝るんだ……私のベッドで
はう……」なんて言つて一人赤くなつて布団抱きしめてるし?
寝かせた後はベッドの横で「……添い寝とか……何考えてるの私
!?」とか妄想してゐるし? 何か一言へりこあつても聞はせたらな
いんじやない?」

「あの香りはタシ//の……」

「あらあら? 香りがどうかしたの? お姉さんに話してみなさい
?」

「……つ、なんでもないです、気にしないでくださいー。」

「顔真っ赤よ?」

……不覚……!

第六十話 前祝

「……ではお荷物確かに届けしました、またの「J利用をお待ちしています！」

「……はあ、ご苦労様です……」

無暗に元気な配達員の声を聞きつつ、呆然と立ち尽くしていた。俺は突発の事件に弱い。だから、突然、姉ちゃんが、推定20kgの荷物を、俺宛に送つてなどきたら、脳がフリーズを起こすのも当然なのである。

「……とりあえず姉ちゃんに電話しよ!……」

結局、いくら考えても思いつかないので、当人に確かめてみると。宅配物を開けてみる、という選択肢は、私物だつたら物理的な話し合いという名のリンクに早変わりするので却下。プライド？そんなものの前では値打ちなど無きに等しい。

そもそも、姉ちゃんと会話すると精神に多大な負担がかかるから、あまりしたくはないのだが、是非もない。……鬱だ。

「もしもし直樹？ 届いた？」

「荷物のことなら届いたぞ、なぜか俺宛で」

「そりゃー当然よ、だつてあんたへのプレゼントだもん

「プレゼント？」

「あ、もしかして早すぎた？ でも一週間前だもんね、許容範囲内

でしょ」

「あー、つまりこの宅配便は……」

「そ、あんたへの誕生日プレゼント」

「……とまあ、俺は自分の誕生日を忘れたわけなんだ」「おーおー田那、痴呆か？」

「自分の誕生日忘れるとかー、末期だよねー」

やかましいわ。意外とへこむぞこの野郎。

「で、親愛なる旦那の御姉様からの贈り物はなんだつたんだ?」

「相当重かつたんだよねー? 段ボール一杯の札束とかー?」

「怖いわ!」

実際そんなもん送られてきたら、姉ちゃん相手でも警察に通報するだろ。どう考へてもまともな金じやない。

「違うよな旦那、20kg分の米とかじやね」

「何が悲しゅうて、年に一度の誕生日に米を貰わんといかんのだ」ダンボール開けたらコシヒカリとか笑えねえよ。

「じゃあわからんいやー、」

「降参だ」

「お前らの発想力には重大な欠陥があるとしか考えられん……」

「脳外科に行つたら多少良くなるかもしれん。……いや、医者が匙投げるレベルだらうな。」

「で、貰つたのは?」

「ダンベル」

「…………」

「あーーー」

……姉ちゃんが俺に何を望んでいるのかがわからない。

同時刻、同クラス。少し離れた席で聞き耳を立てる少女が一人いた。

「……そつか、なおくんの誕生日、もつすぐなんだ……」

「辰美、おーい、話聞いてるー?」

「……インパクトが大事だよね……」

「……だめだこの娘」

第六十一話 スタバ

晴れた日の昼下がり、私たち三人 私、ルリ、石川先輩はスタートーバック の店内で話し合いをしていました。

「……ここに呼び出した理由、わかるかな？ 瑞璃ちゃん？」

若干の寒気がするのは、室内の温度が低いだけではないでしょう。

……具体的に言うと怖気のようなものでしょう。おそらくルリはこの空気になることを予期していたと思われます。そうでなくしては「石川先輩とお茶しに行くから一緒に来ない？」なんなら奢るよ？」とまで言つて私を連れてきた意味がありません。そうでなくとも私はルリは、四六時中一緒にいるのですから。あまり石川先輩のことを見らない私を連れてくることで、態度を軟化させようとしたのでしょうか。効果が上がつているとは考え難いのがつらいところですが。「その様子ですと、知つてしまつたようですね……先輩の誕生日を」

……。先輩……といつと、三井先輩のことでしょうか……？

先曰……その……私に……「可愛い」などと言つた……。

「その様子だと、忘れてた、つてことじやあないみたいだね？」

「この私が先輩の誕生日を忘れるとでも？」

……そうですか……三井先輩の誕生日……。

「教えてくれてもよかつたんじゃないかな？」

「聞かれませんでしたからね。少なくとも先輩を争つといつ点での敵に、わざわざ塩を送るメリットはありませんので」

……別に、私が日ひるの感謝をこめてプレゼントを渡しても、不自然ではありませんよね……？

「まあ、別ルートで知ることができたからいいんだけどね？」
だけの話、なおくん女性からプレゼントもらつたらしよ？」

「なつ……ー？ どこのどいつですかー？ 先輩を狙う女狐はー？」

……でも、男の人が貰つて喜ぶようなプレゼントとは、どのようなものでしょう……？ ……好感をもたれるような……。

「ふふふ、瑠璃ちゃんも黙つてたでしょ？だからこれでおあいこ」「くう……気になります……」

……三井先輩も読書家とのことですから、本はどうでしょうか？しかし持つている本を渡されても困るでしょうし……。

「で、瑠璃ちゃんは何あげるの？」

「……杉田先輩にお菓子の指導を受けてるので、ケーキをあげようかと」

本人に聞くというのは？ しかしそのことで気を遣わせても……。

「ああ、それいいね！ 私も何かお菓子をあげようかな？」

「石川先輩がそれをするのはやめた方がいいと思いますよ？ 被るからというだけで他意はありませんが」

……男性に物を渡すなど、あの父親以外経験がないのが悔やまれます。

「ああ」「めん、岬ちゃん無視して一人で話してたね」

「岬、どうかしましたか？」

「……男性にプレゼント、何をさしあげればいいのでしょうか？」

「……好感をもたれるようなものとこうと……」

「えつ！？」

「はい！？」

……この一人はなぜそんなに驚いているのでしょうか。

第六十一話 スタバ（後書き）

なぜ俺は
テスト期間に
書いている

石川家にて、一人の少女が悶々と悩んでいた。

「なおくんが興味を持つてくれるプレゼント、何が最適だろう?」
「なんでも喜んでくれそうな気もするし、嬉しそうにしていても内心はそうでもないかもしない。まして再会してから初めての贈り物、妥協はしたくない。お金かけるのは気を遣わせるだけのような気もするし……。」

「男の子って何を貰うと喜ぶのかな? …… そうだ
…… 知り合いの男の子に聞いてみよう。そう、なおくんといつも一緒にいるような……。」

所変わつて古木家。ここにも悩める少女が一人。

「そもそも先輩が去年までに私の気持ちに気付いていてくれれば……」

「今年は初めて、先輩を争う本格的なライバルともいえる存在が現われてしまった。中学時代は、私が先輩の周りを見張っていた甲斐もあって、そこまで先輩を狙う人はいなかつた。先輩の魅力に気付いた人には、先輩の恥ずかしい、百年の恋も冷めるような姿を見せることで「退場」いただいた。……そういう悪戯をしたから、私の気持ちを気づいてもらえたかったとも言えるが、今はそれを悔やんでも仕方がない。」

「……石川先輩は、確かにいい先輩だと思つ」

「周りに気を配ることもできるし、温厚篤実な性格は私から見ても魅力的だ。……でもだからといって。」

「……胸に無駄な脂肪をあんなにつけている人に、先輩を取られた

くない……っ！」

なんとなく決意を新たにした。

そしてもう一人、まじめな故に考えが迷宮入りしている少女がいた。

「男性が貰つて喜ぶもの……？ でも男性に相談できる知り合いだなんていないですし……」

自分ひとりで考えたところで、答えは出ないのでしょうか？ そんな気がしてきました。

「……そもそも私には、男性に好かれるための方法なんて、習得する必要がなかつたのですから……」

と、そこまで考えたところで赤面する。三井先輩に好かれるため、などといつ思いが心の奥にあつたことに気付いたからである。

「……別にそういう関係になりたい、というわけではないのに……。しかもルリの思い人ですよ？ ……これはきっと気の迷いです。あくまで田代の感謝の気持ちを表すプレゼントなのです……」

普段はいくら考え事をしても痛くならない頭が、今日に限つて痛い。やはりこういうことは私一人で答えの出せることでは……。

「……一人、いましたね。身近で、一応相談できる男性が……」

あまり相談したくはないのですが、背に腹は代えられません。すぐに戻りに行くことにしましょう。

「……娘が男性への贈り物について相談してきたのですが。私としては、一度でいいから「お前に娘はやれん！」と言つてみたいのですが……。しかしこの言葉をいつ日が来てほしくはないですねえ……」

授業しろよ。

第六十一話 苦惱（後書き）

十時間半、男一人でカラオケで歌い続けたら喉が潰れた件

生誕祭（前書き）

誰も期待しなくなつたであらう今になつて投稿。

「誕生日おめでとう旦那！」

朝自宅マンションの駐輪場に行くと、珍しく義人が先に来ていた。いつもは奴の家までおこしに行かないといかんくらいなのに……まあ理由はあれだらうが。

「……聞きたいことがある」

「おやおや？ 旦那が怒っているのはどうしてかな？ まるで嫌なことでもあつたみたいじゃないか」

「その言葉を冗談でなしに言つてはいるのなら褒めてやる」

「ナンデオコツテイルノカワカラナイヨ」

はいはい棒読み棒読み。

「……なぜつて？ ……教えてやるよ……」

一呼吸置いてから義人の耳元で叫んでやる。

「貴様が深夜三時に携帯アラーム設定なんかするからだ！…」

耳元で突然「ハーツピーバーステー旦那！ ハツピーバーステー

旦那！」なんてアラームをされて

「つるさいぞ旦那。近所迷惑だと思わないのか」

その言葉そつくりそのままお前に返してやる……。

「だいたい誕生日を生まれた日時に祝つて何が悪い」

「少なくとも俺の心臓と安眠に悪い」

「微々たるものだ」

……なぜここまで上から口線でものを言つかなこいつは……。

「温厚な俺でもしまいには怒るぞ？」

「ヤニヤ笑いやがつて……」

「なら聞くけど、どうして三時、アラームで起こされた直後に怒りの電話を俺にかけなかつたんだ？」

「……それは……」

「なんだかんだで祝われて嬉しかつたんじゃないのか、ん？」

…………。

「それにもう少し理由があるだろ? 言つてみる」

「……朝弱いお前が熟睡してるのを起こすのも気が引けた、それだけだ」

「先輩! ? 何照れてるんですかあ———つー?」

「なおくん! ? 同性愛は非生産的だよその道に進んじゃダメだよ! ?」

「うわびっくりした!」

「保護者にタツミ、ビリした藪から棒に出てきて? 学校あるのに何やつてんだこんなところで?」

「道に迷つた……わけではないよな、当然。毎日歩く道を間違えてここに来てしまつたなら、なかなかカオスではあると思うが。

「密かに誕生日プレゼントを渡しに来てみたら、こんなことに……!」

「非生産的だよ! なおくん×杉田君は高城さんの描く同人誌の中だけで十分だよ! 現実でやつちやだめだよ! ?」

「今なんか聞き捨てならんことが聞こえてきたぞ! ?」

「俺の知らないところでいつたい何が! ?

「とりあえず皆落ちつけよ」

……正論だが、元凶の義人に言われるのが納得いかない。

落ち着いたのはいいものの、女子一人の様子が何やら険悪だった。

「……石川先輩もずるいですね、どの道教室で会うのにわざわざこんなところまで来ているなんて。歳を重ねたあと一番に会いたかった……とかそんなのですか? だとしたら随分乙女チックですねえ……毒舌だな。俺以外に嫌みを言うのは珍しい。

「……とか言いながら、古木さんも来てるじゃない……。杉田君もいるし……一人で登校したかったのに……」

……空気が悪い、だれか換気してくれ……屋外だけど。

「旦那、誕生日なんだしテンション上げていこうぜー。そういえば清水が旦那は大きいのと小さいのどっちが好きか聞いてたぞ?」なぜか保護者とタツミの眼が光った気がする。

「……何の大きさが?」

「やだなあ旦那、それを女性がいる前で聞くのはセクハラだわ」

「つかぬ事を聞くが、それを今ここで聞く必要は?」

「皆無だな」

だれか槍持つてくれこいつを突き刺すか!。

「…………」「…………」「…………」

……わざわざまで一人で言ひ合つてたのに、黙つてこいつの話に耳澄ませてるし。

「…………そうだな! 平均、そう普通くらいがいいんじゃないかな! うん、それに特定部位で女性を判断するのはよくないぞ、うん!」

「おやおや? その大きさで女性を判断するなんて俺は言つてないぞ?」

「混ぜつ返してんじゃねえよ!」

「普通がいいそうですよ、大きい石川先輩」

「平均がいいそうだね、小さい古木さん」

ちなみに背の大きさは一人とも平均から一メートル五センチ以内であるため、そこまで大きさが変わることはない。

「…………なにやら針のむしろにいる雰囲気だ……」

「旦那が気の利かない返答をするからいかんのだよ」

つるさい黙れ。

「ルリ? こんなところにいたのですか……学校に行きますよ?」

「健三さんの娘さんの……岬ちゃん? ああ、保護者を迎えて来たのか」

「! ? 三井先輩! ? あ、あの……お誕生日、おめでとうございます……」

どうして知つてゐるのかを聞くのは野暮だろ?。

「ありがとう……どうしたんだそこ二人は?」

見事にフリー・ズしとるな。

「わ……私もまだ言つてないのにー、どうして岬が先に言つてるんですかー!?」

「私もまだ……なおくん誕生日おめでとう……」

「ああーーー、抜け駆けは卑怯ですー！ 先輩ー、誕生日おめでとうございますー！」

「…………」

「…………」

「旦那旦那」

「何だ義人」

「耳元でささやくな気持ち悪い。

「…………健三さんの娘さん、大きさが普通くらいじゃね」

「…………」

つい胸に目が行つてしまふ俺。

「…………あの、三井先輩……あまり胸を見ないでください……恥ずかしいですから……」

「つすまんー！」

制服の上からとほいえ無遠慮だつた。顔を赤くしながら胸を隠すよつにする岬ちゃんは可愛くもあつたが。

「旦那、やーらしー」

お前とはいつか雌雄を決しなければならぬにようだ。

「…………」

「…………」

「…………さあ、学校に行かないとなー！ 遅刻するのは勘弁だしー！」

沈黙を保つたまま、突き刺すような視線を浴びせてくる一人から逃げるようにして登校した。……なぜ誕生日なのにこんな気まずいのだろうか……。

忙しい一ヶ月でした。ユリケとかバイトとかバイトとかバイトとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1219f/>

ええじゃないかさん

2010年10月22日13時36分発行